The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 大阪天満宮御文庫蔵木戸元斎筆『狭衣物語』巻四・翻刻と解題（上） |
| Author(s) | 小林, 理正 |
| Citation | 詞林. 2019, 65, p. 38-78 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/71479 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

https://doi.org/10.18910/71479　　詞林　第65号　2019年4月

# 大阪天満宮御文庫蔵木戸元斎筆『狭衣物語』巻四・翻刻と解題（上）

小林　理正

## 一、はじめに

大阪天満宮御文庫蔵木戸元斎筆『狭衣物語』（以下、元斎本）を斯界にはじめて紹介したのは片寄正義であろう。[1] 元斎本は巻四末尾に里村紹巴自筆識語（後掲①識語）を備えており、それをみるかぎり紹巴所持本の写しとして知られる伝本である。元斎本を紹巴の著述『狭衣下紐』依拠本の写しとして想定した片寄は、当該本を近世版本である元和九年本と承応版本という〈いわゆる流布本〉の上位本に位置付けた。また中田剛直は元和九年本と承応版本の上位本に「紹巴所持本を写した天満宮本若くは毛利元康本そのものに拠れるかは別」としながらも「連歌師間に所伝せし一本に拠れる事は間違ひないであらう」と指摘した。[2] 以上の元斎本にまつわる見解は中城さと子、川崎佐知子らの流布本『狭衣物語』の考究によって追認されたといえるだろう。[3] 紹巴所持本が〈いわゆる流布本〉の上位本として想定されてきたことを思うとき、『狭衣物語』諸本における元斎本の資料的価値は極めて高いといわねばなるまい。

如上のように『狭衣物語』諸本のなかでも重要伝本として位置付けられる元斎本だが、当該本は『校本狭衣物語』に採られなかったこともあり、中城、川崎論考が現れるまで、その本文の実相を知る者はわずかであった。今回実見、および翻刻掲載の機会を得たので、元斎本の情報を整理しつつ、いくつか気になる点について述べてようと思う。

## 二、大阪天満宮御文庫蔵木戸元斎筆『狭衣物語』について

そもそも元斎本が注目された理由は以下の二種の識語を備えていた点にある。

① 紹巴自筆識語

此狭衣全部四帖元斎寿三／借予本書写畢外題所望之／次加奥書也

天正廿年桃花之節後　　法橋紹巴（花押）

②
元斎自筆識語
當于／大閤大相国朝鮮国御征伐之／時張陣於肥之名護屋者春／月也今茲季秋廿五日詣西府之／天満宮維持幸而有連歌一千／句之雅会不顧愚昧陪席末実為／神助也此狭衣全部四冊在洛陽借／臨江老人秘本雖謄写之當社一乱以来／作灰燼故別當信寛態求也仍奉／納之而後代留予名於此廟者栄之又栄也

天正二十稔菊月廿五日　　越後木戸元斎　寿三（花押）

①を読み解くと「元斎寿三」なる者が紹巴所用本を借り出し、書写したものが当該本だとわかる。ただし、外題は元斎に請われた紹巴が揮毫したものであるようだ。書写者・元斎とは越後の武将で、歌人であったようである。[4] また②をみると、元斎本の親本は「臨江老人秘本」であったらしい。「臨江老人」とは紹巴のことであるから、紹巴の識語と矛盾しない。なお②にみえる当該本の来歴については既に中城、川崎が詳密な考証を行っている。そちらを参照されたい。

書誌についても中城、川崎が既に紹介しているから、ここでは簡単にまとめる程度に示しておく。

【書誌】

○【作品名】　「さころも」

○【請求記号】　三〇―一

○【冊数】　三冊（巻一欠）[5]

○【装幀】　袋綴じ

○【料紙】　楮紙

○【大きさ】　縦二六・五糎、横二〇・二糎

○【書写年次】　「天正二十稔菊月廿五日」（巻四木戸元斎識語より）

○【表紙】　紺地に金銀泥で雲霞・草木・蝶などを下絵に描く。

○【外題】　金地の短冊形題簽に「さころも一（〜三）」と書く。奥書によると外題は紹巴筆。ただし摩耗や経年劣化のために墨が薄くなったようで、巻三・四の巻数をなぞり書くが、そのさい「一／三」と巻数を書き誤る。

○【内題】　（ナシ）

○【見返し】　金銀の切箔や野毛を散らし、砂子を振る。

○【遊紙】　前遊紙は巻によって前後するも一丁から二丁分あり、後遊紙は全巻一丁分有している。

○【蔵書印】　全巻墨付き丁数一丁表右肩に「天満菅廟御文庫奉納／書籍標印不許賣買」朱長法印があり、同丁右下に「延寿王院蔵書」（枠無し）朱印がある。巻二・三は最終丁左下隅に「中野桑林堂」朱方印、巻四にのみ一四三丁表

右下に「阪府／内本町二丁目／中野啓藏／製本発兌之記」朱長方印がある。

○【丁数】
巻二・一一六丁表、巻三・一四二丁表。巻四は物語本文が一四二丁裏、なお一四三丁裏に①識語が、一四四丁表～裏にかけて②識語がある。

○【一行字数】
およそ二二字～二四字内外

○【一面行数】
一〇行

○【和歌書式】
一行目行頭を二字下げ、二行目以降を下接本文に続ける。

○【識語】
巻四に二種の識語がある（里村紹巴筆のものと元斎自筆のもの）。
本文はおおむね流布本本文と同様だが、対立する場合もあり、検討を要す。

○【備考】
本文には異本注記がまま認められる。わずかだが重ね書きや補入、文字を擦り消し訂正する場合があったり、目移りと思しい脱文があったりもする。なお誤写は少ない。

## 三、元斎本巻四の本文

ここからは本文の確認をつうじて元斎本巻四について少し考えてみたい。主に対校に用いる流布本本文を有するとされる伝本は以下のとおりとなっている。[6] また必要に応じて異本等も参看するが、掲出本文と同文である場合は丸括弧内に入れて伝本名を記す。なお音便化による本文異同は除く。

① 実践女子大学常磐松文庫蔵中臣祐範奥書本
② 実践女子大学常磐松文庫蔵寛佐奥書本
③ 実践女子大学黒川文庫蔵一二冊本
④ 元和九年本
⑤ 承応版本

①②は付属する『下紐』の奥書から紹巴所持本を書写した伝本と川崎に想定されている。[7] ③は元斎本とともに紹巴自筆識語を有する大阪青山短期大学蔵毛利元康筆本（稿者未見）の成立に関わると中城により推測された伝本である。④⑤は〈いわゆる流布本〉で、当該本の上位本に紹巴本が想定されている。いま仮に従来の想定にしたがい、元斎本本文を対校することにする。

Aいかなるかたさまの事そと思ひつゝけ給にたゝ大将の御事そと心え給まゝに（元斎本・一丁オ）―祐範本・寛佐本・黒川本（・内閣文庫本）

Bいかなるかたさま（いかなるさま―承応版本）の事そと思ひつゝけ給にきのうのきんのねとあるはたゝ大将の御事そと心え給に―元和九年本・承応版本

祐範本と寛佐本、黒川本の三本は元斎本と同文である。その一方で元和九年本と承応版本には対元斎本で異同が認められる。たとえばB破線部と同様の本文を有する伝本を探すと蓮空本（＝学習院本）に「いかなるかたさまの事ともふと心

えたまはず。昨日のきんの音とあるに、大将殿の御事なめり」（二一二三頁）とあるとわかる。また九条家旧蔵本は「たゞ、きのふのきんのねとあるに、大将の御こと、夢の中にも心え給ぬるより」（五頁）とあるから、破線部は混態本本文に由来する表現であるかもしれない。なおこのことは異本として知られる鎌倉写本の一本・慈鎮本に「いかなるかたさまのこと、もえこゝろえ給はすた、大将とのゝことなめり」とあって、当該本本文へB破線部を挿入し、本文を整えると蓮空本本文となることからも想定しうる。なお当該部を有する他の鎌倉写本（為明本）を確認すると小異こそあるが慈鎮本とほぼ同じである。

C心をいたしてもかつはさるへきにて（元斎本・六丁ウ）
―祐範本・寛佐本・黒川本（・内閣文庫本・為家本）
D心をいたしいのり給なからも又かつはさるへきにて―
元和九年本・承応版本

流布本とその上位本に目される伝本間に異同が確認できる点は留意しておかねばなるまい。なおD傍線部は蓮空本「心をつくしてをの〳〵いのりきこえても、かつはさるべき世にてこそ」（二一二一頁）、慈鎮本「こゝろをいたしておの〳〵いのりきこゑさせ給てもかつはさるへきにこそ」と関係するか。また為明本が「心をゆかしてをのおのいのりきこえさせてもかつはさるへきことにこそ」とあり、慈鎮本と同グループの本文となっている。Cは為家本と同文であるから、鎌倉期には既に存在していたと思しく、D傍線部は伝写過程で加えられたものと考えてよいかにみえる。

ここまで紹巴本と目される伝本間に揺れを確認できなかったが、当該伝本間に異同がないというわけではない。

E猶ひたみち（ひきはち―黒川本）にすてかたかりける身の程かなとおほしらる（元斎本・九丁オ）―寛佐本・黒川本
Fかた〳〵につらきかたにそすゝみたまひける―祐範本・元和九年本・承応版本（・内閣文庫本）

EFの対立は目移りや誤脱衍によって説明できるものではない。加除訂正を加えたところで、EからFが生じるとは思えず、紹巴本とFとの間には距離があると認めざるをえまい。なお慈鎮本はEに近く「なをひたすらにすてかたかりけるわかミのほとなとおほしゝらるへし」とあり、為明本もほぼ同様であるものの、為家本が「かうかた〳〵につらきかたにそすゝめ給ける」とあり、実質Fと同文になっている。EFと類似する本文が鎌倉期に存在する有り様は元斎本と〈いわゆる流布本〉とが異なる流れを汲む伝本であることを思わせる。

Gおなし御ゆかりにてあつかひ聞え給ふさまかたしけなし（元斎本・一四丁オ）―寛佐本・黒川本
Hうちのかはをさにさへそないたてまつり給める―祐範本・元和九年本・承応版本（・内閣文庫本・為家本・慈

鎮本）

為明本は「うちのうゑをさへないたてまつり給えりかたしけなし」とあり、Hを基調としながらGにみえる「かたしけなし」も有しており、混態の様相を呈している。鎌倉写本にはHがみえる一方で、Gがみえない。となると、Gは鎌倉期以降の本文と考える必要もあるだろう。またGからHが生じると想定することは本文をみるかぎり、困難であるように思う。〈いわゆる流布本〉の上位本にしいて紹巴所持本を想定する必要はないのではないか。

## 四、まとめ

ここまで元斎本巻四の本文について些か確認した。もちろん文脈における本文の有り様を捉え、解釈上不審な異文をすべて掬いあげたわけではなく、機械的な検討に終始したから、その有効性について疑問がないわけではない。とはいえ、元斎本と〈いわゆる流布本〉との間に顕著な対立本文が存在するという実態が浮き彫りになったことで、巻四については紹巴本を元和九年本と承応版本の祖型とみる判断に疑義が生じたであろう。深川本と異本本文のみならず、流布本『狭衣物語』の本文の再検討が今後求められよう。

なお今回翻刻するにあたり、巻四から掲載することとした。というのも『校本狭衣物語』に巻四がないために、巻四の本文をめぐる検討は他巻と比べてわずかとなっているためである。それゆえ巻四より本文を紹介し、巻四の本文研究に利用可能な資料を提供することを企図した次第である。なお翻刻のさい、紙幅の都合上機械的に本文を分割し、上下に分かち掲載することとした。ご寛恕を請う。

【注】

（1）片寄正義「狭衣物語流布本考序説――無名草子所引狭衣物語本文を検討し、所謂流布本の本文吟味に及ぶ――」（『国文学論叢』創刊号（第二号）、昭和一〇年四（七）月）、同「狭衣物語伝本考」（東京理科大学「国語」創刊号、昭和一一年七月）。

（2）中田剛直「狭衣物語巻一伝本考」（『国語と国文学』昭和三三年五月）。

（3）中城さと子『流布本狭衣物語の研究』（新典社、平成一五年）。川崎佐知子『『狭衣物語』享受史論究』（思文閣出版、平成二二年）。以降、本稿で言及する中城・川崎説はすべて前掲書に拠る。

（4）『国書人名辞典』第二巻・四四～四五頁。

（5）『大阪天満宮御文庫国書分類目録』（昭和五二年）をみると「二冊（欠一冊）」とあるが、「三冊」の誤植であろう。

（6）対校に用いた伝本は確認の便を考慮し、既に刊行されてあるものを中心に取りあげた。なお出典は以下のとおりとなっており、略号を丸括弧に入れて続けて示す。実践女子大学常磐松文庫蔵中臣祐範奥書本（祐範本）／実践女子大学常磐松文庫蔵寛佐奥書本（寛佐本）／黒川文庫蔵一二冊本（黒川本）。黒川文庫蔵一二冊本――実践女子大学文芸資料研究所編『物語史研究の方法と展望』実践女子大学文芸資料研究所電子叢書Ⅰ（平成一一年）附録のCD-

ROM収録。元和九年心也開板古活字本（元和九年本）『古典資料類従』。承応三年整板本（承応版本）『狭衣物語下』平安朝物語板本叢書2（有精堂出版）。為明本・為家本・慈鎮本―『狭衣物語諸本集成』一（～三）巻（笠間書院）。内閣文庫本―国文学研究資料館の紙焼き写真。蓮空本―『古典文庫』。なお元斎本は撮影写真を用いた。

（7）①②はともに「此狭衣抄二冊　臨江斎紹巴／被注之依許可書写之畢／天正二十年三月日　中臣祐範」、「本云此狭衣抄二冊者去年以昌倪所持之本令／書写之今茲又以法橋昌琢本按校之了／元和四年應鐘朔日　寛佐」との識語を有している。「此狭衣抄二冊」とあって元斎本にみえるような「此狭衣全部四帖」とはなっていない。加えて『狭衣物語』を「狭衣抄」と呼ぶとは思えない。したがって、この識語を共に伝わる『狭衣物語』にまでかかるとすることはしない。

【附記】

貴重書の閲覧、ならびに翻刻掲載許可のご高配を賜りました大阪天満宮御文庫、ならびに関係各位に衷心より御礼申しあげます。

（こばやし・ただまさ　本学博士後期課程在学）

## 【翻刻】

### 【凡例】

一、底本は大阪天満宮御文庫蔵木戸元斎筆本『狭衣物語』（請求記号：三〇―一）巻四の写真版を用いる。

一、本文は原本の体裁を可能な限り尊重するものとする。丁移りを「|」で示し、丁数と表裏を「|」（〇丁オ（ウ））と記す。なお丁数は墨付き丁数である。

一、変体仮名はすべて現行の平仮名に改める。また「ハ／ニ／ミ」は「は／に／み」とし、旧字体、異体字は通行する字体に改める。

一、ミセケチはすべて「取り消し線」で示す。

一、削訂の場合「X（Y）」と表し、削られた文字を丸括弧内にいれて示す。重ね書きの場合「X〈Y〉」と表し、下にある文字を山括弧内にいれて示す。

一、傍記は、該当本文横に記す。

一、損傷本文と思しいもの表現も原本にはあるが、すべてそのまま翻字する。判読困難な場合「□」で示す。相当する字数が明らかな場合、当該字数分「□」で示す。

一、今回は巻四のおよそ半分に相当する七三丁ウまでを翻刻する。

さころ□　三」（表紙・題簽）

（遊紙一丁）

ひかりうする心ちこそせめてる月の雲かくれ行
ほとをしらすはさるはめつらしきすくせもありて
おもふ事なくなりなむ物をとくこそ尋めきのふの
きむのねあはれなりしかはかくもつけしらするなり
とひのさうそくうるはしくてやむことなき気色
したる人のいふと見て打おとろき給へるとの、
御心ち夢うつ、ともおほしわかれすいかなるかた
さまの事そと思ひつ、け給にたゝ大将の御事
そと心え給ま、に物もおほえ給はすをそはれ
給へるけしきのいみしきをうへもいかなる事そと」（一丁オ）
おほしさはくにもとみにはきこえ給はぬとはかり
ありてからうしてしか〳〵夢ともなく見えつるは
いかなる事にかとかたりきこえ給をきゝ給うへの
御心ちまいてよのつねならんやはつねの事といひ
なからもきのふのけしきなとはなをあやしうめ
とまりしをなとてよへもとゝめきこえさせすなりに
けんときはとてれいもせさせ給ぬ事とものれうとて
ほうふくあまたまうけさせ給とこの日比きゝつるも
さらはいかに思ひをきつる事のありけるそと二所
しておほしまとふさまかた時たにいみしけなり」（一丁ウ）
殿はせちに思ひつより給ておきいて給へれと
さらはいかなる野山にか行ましり給ぬらんとおほし
やるにたちうこくへき心ちもし給はねととくたつ
ねよとかもの明神のをしへ給へるになくさめてさう
そくなとし給てまつほり河の院へそおはしけるかの御
かたのみかとより入給に馬ともにくらなとをきて
たゝいま人の出へきにやとみえたり大将もいと夜ふかく
といそき給て出給ほとなりけりとの、御車を
にはかにひき入たるにおとろき給てさし出給へる
をうちみつけきこえ給へるに中〳〵いまそ涙もこほれ
」（二丁オ）
給てかものみやしろの御かたをふしおかみ給てなをしの
袖ををしあて給へる御けしきなとあやしきをいかなる
ことき、給てかくよなかにまとひわたり給へるならむと
おほすにいてやと心かりける御心かなあまたあらん
にてたにすこしもとりわきたらん心さしのほとを
みむにはいとかゝる心はつかはしをまいてかはかりおもひ
まきらはすへきたくひたになく一日かた時見きこえぬ
程は恋しうかなしき物におもひきこえたるをみる〳〵
いかなるかたにおほしたちて世をそむきすてんとは
出たち給へるそいとよしをのれをこそおほしすてめ女にて
」（二丁ウ）
又なくおほしまきる、かたなくならひ給へる御心ちに見
給はすなりなはかた時なからへ給へしとやみ給かきり

あらむ命のほとをたにかの見給はんほとはかけとゝめん
とはおほすましうやあるへき仏もけうやうをこそを
もき事にはの給めれかくふけうの御心にてはおほし
すつらんみちのさまたけにもこそなり給へなに事も
見なさるへき契にこそあらめかくなむ思ふと心うつ
くしうの給はゝあなかちにせいしきこゆへきにも
あらすたゝわか身は残りなきよはひになりたるに
ふりすてられきこえたらむも心ひとつのかなしさは
」（三丁オ）

さる物にて人の見きかむこともはつかしく仏のおほ
さむ事もつみさり所なうかなしかるへきをたゝもろ
ともにいかにもない給へき仏のすゝめ給へるにもあ
らむいかなるかたさまにてもみつからはをくれきこゆ
ましけれはいとよしいまひと所のありさまこそ後の世
にもいとかゝる御心のみたれなからはおなし所にあひ見
給はむ事かたかるへかめれなといみしき事ともを
なく〳〵いひつゝけ給をつく〳〵ときゝ給に人しれぬ心
のうちをいかにして見あらはし給てけるそとおほすにも
けにこゝらのとしころこの世もかの世も露はかり思ひ
」（三丁ウ）

のこす事なうおほしすてつれとたゝいまいとかゝる御心
まとひを見奉り給にはいとかはかりまておもひあくかれ
にけむ心のほとそわれなからつらういふかひなくおほし
しらるゝけにまいてうへの御心のうちおほしやるはいま
すこし心くるしくて人やりならす袖もぬらし給物
からかうまてきゝ給てけれはまついましはしふよう
なめりと思給に猶おもふ事かなふましき身にやと
中〳〵たちまちにおほしたゝさりつる過にしかた
よりもいみしくくちおしうかなしともよのつね
ならねとたゝ心えぬさまにもてなし給て女院の御」（四丁オ）

心ちことなることおはしまさすとうけたまはりしかは
ときはと申所にねんころにあひかたらひ侍あまの
わつらふよしうけたまはりしをとふらひ侍らむとて
けさまかり出つるをもしいかなるかたさまにきこし
めしたるにかなにことによりてかたちまちにさま
ては思ひ給へならむとつれなうきこえ給もいと
つらう心うくて袖もえ引きはなち給はぬをかつは
いてやむけに後の世もかへりみすつたなき心のほとゝ
み給らむかし浄蔵浄眼の往反遊行し給けむを
見給てよりこそは妙荘厳王も心きよき三昧ともを」（四丁ウ）

つとめ給ひて華徳菩薩ともなり給けれまことに
かゝるつゐてにまつや我なりなましかはかり思ひ
たちにけれはつゐにはえさまたけきこえしなとは
おほしなりぬれとれいならぬ御かりのさうそくに
やつれ給ていかにそや思ひみたれ給へる御さまの
ほのかなる空の光にゆゝしうみえ給をあらましき

よものあらしにたくへこけの衣にもやつしきこえ
てはいける世にきこえてさらに皆成仏のきはに
も心きよからすやとうちまもり給ふになをけに
劫濁乱時は諸仏以方便もかひなくありけるかなと」（五丁オ）
かへす〳〵かなしくもはつかしくもおほししられ
けり夜のあけぬるまてうちもやすませ給はす
なをおほしむせひたる御けしきのいと心くるしう
てつみうらむかしとまことにおほえ給へは思ひかけぬ
さまをのみ返〳〵きこえなくさめ給てれいの御かたに
わたしきこえ給なとさりけなうもてない給へと御
心のうちはなをみたれまさりてむねもつとふたかり
給へりあかうなれは殿はうへの御もとへ出たち給ける
さまなとこまかにかいて奉り給へるを御覧するに
いかてかは神の御心ををろかにはきこえさせ給はん院の
」（五丁ウ）
御まへはかりにはこの御夢かたりきこえさせ給けり
神殿にまいらせ給ていよ〳〵かゝる心を思ひなをるへき
さまに申させ給へなときこえさせ給さらはかくおほし
てやきむのねもれいならす心とゝめ給へりけんさも
なり給なましかはいかにあさましとおほしめすとの
には思ひかけさりつる御夜なかありきよりはしめ
れいならぬ御けしきなとを心えすいかなることにかと人々
は思にうへなともわたらせ給てやかてその日よりかもの
みやしろにてはしめさせ給御いのりともいとこちたし
まいらせ給へき日なとさためさせ給さまなとなに事
」（六丁オ）
のいかなりける事そと世の人もきゝおとろきけりおほ
かたの御いのりもいつとてもたゝこの御れうとお
ほしいたらぬ事なきなかにもとりわきておほしたの
ませ給へる御いのりのしともにくはしくの給はせつゝ
一心にいのり申へきよしなく〳〵の給へはみなおとろき
つゝ心をいたしてもかつはさるへきにてこそはかはかり
めてたき御身なから世をおほしはなるらめとあはれにそ
おほえけるそのゝちいとゝかた時のほともうしろめたく
あやうき物に思ひきこえ給て御ありきなともせさせ
奉り給はすたゝいましはしをまち給へあなかしこをくら
」（六丁ウ）
かし給なとの給まゝに涙をなかし給へはいと心くるしく
又世の人のきゝつたふらむはかりもかへりては中〳〵心
あさうものくるおしかりぬへけれは思ひかけさりしさまを
のみうへにも返〳〵きこえ給ていかてか物思ひいれぬ
さまをみえたてまつらむとよろつにもてない給へは
けに中〳〵すきぬるかたよりもうはへはかりははれ〳〵
しうなり給へれと心のうちのくちおしさはなをえ
おほしもなをされすいみしくおほしなけかるゝなく
さめには入道の宮にそ後の世にさへすてられ奉るへ

きすくせにやあさましうほいなき心のうちなとすこし
」（七丁オ）
もらし給て
いそけともゆきもやられぬうき嶋をいかてかあまの
こきはなれけむいひしにかはる心のほとをいと、いかにと
はつかしきまてなとかきつくし給へるをれいのほのうち見給
て
いかはかり思ひこかれしあまならてこのうきしまを
たれかはなれんなとおほしつ、けらるれとはかなかりし
てすさひも見しやうにきこえ給し後はうしろめたうて
御心のうちよりももらし給はさりけり一品宮にま
いり給はぬことをたれもいみしきこえしかとこの後は
さやうの事をくるしくおほしけるにやとてかけても
」（七丁ウ）
きこえいて給はすひるまのほともたちいて給をいと
うしろめたけに思ひきこえ給へれとさのみこもりゐ
給へらむもをとき、見くるしかるへけれは一品宮はかり
にはまいり給てまきらはしきありきもし給はさりけり
されとなにことも世中のことかくれなくてをのつから
きく人〳〵ありてまことしくそりやつし給へらん
やうにおしみかなしかりきこゆれは宮もきかせ給ていと、
心うくおほしめす事かきりなし思ふすちことなり
ける人をおと、なとのあなかちにいひつ、かはかりもあら
すれは思ひわひてさまても思ひなりけるにこそは」（八丁オ）
あらめといと、はつかしく見えにく、おほさるれはわた
らせ給こともいとまれなるをとやかくやとなつかしく
きこえあきらむへきかたもなけれはたゝ心えすみし
らぬやうにてすくし給にあまりにうちしきるよるの
ひとりねはいと、めもあはす思ひつ、け給事におほかる
なかにもあしせんのおもひをこすらむそなをいとほい
なき心ちしてまくらもうきぬへき
このころは苔のむしろをかたしきていはほのまくら
ふしよからましなとやすけなくおほしやられける
ひるはつれなしつくり給にこよなくまきる、をよる
」（八丁ウ）
よるのみそなからへやらむとありかたくおほされける
殿の御賀もまうてちかくなりぬれは舞人にさ、れ
たる殿上のわか君たちなと心ことに思ひいそきたり
大將殿にはありし御夢の事なとうへそくはしく
かたりきこえ給けるけにさしもたしかに御覧しけん
にしつめかたき心の中をおほしもとかめてしゐてうき
世にあらせまほしくおほすらむ神の御心のほと
ありかたき物から猶ひたみちにすてかたかりける身の程
かなとおほしらるまいらせ給ける日の事ともなとをし
はかるへしいついかなりしことにかかゝる御願ともは
」（九丁オ）

たてさせ給けるにかとみやしろの神ひともおとろくに
神もいと、御心ことにまもりはく、みきこえ給て夢の
うちにつけしらせ給けむ行末の御ありさまもおほしをき
つるにたかはすとかへす〳〵申あくるこはつかひ
たのもしけなけれとみつからの御心のうちには
　神もなをもとの心をかへりみよこの世とのみは
おもはさらなむひくらしおもしろき事ともをまねひ
つゝすへきにもあらすかやうにひまなくいのりまもり
きこえさせ給さますきぬるかたよりもこちたし
宮にまいりそめ給ては此とのゝおはし所もわさとも
」（九丁ウ）
なきさまにこてなしきこえ給てなれ〳〵たちと
まり給よな〳〵をもいさめきこえ給へれといまは
いにしへのやうにみかきたてゝあけくれたゝ女の御
身をおほしかしつかむやうにていかなるわさをして
この御心をおほしなをさせんすこしも心とゝめ給へ
からむ人もかなかきりあれはおとこはさてこそあくか
るゝ心もとまるらめいかはかりおもひまとへとおやはほ
たしにもおもはさりときこえあはせ給てふた所
してたつねなけかせ給さまともいと哀に心
くるしけなりかゝる事をさかの院にもきかせ給て
」（一〇丁オ）
うらみなけかせ給よしきゝ給てされはよといとき、
にくき事さへいてきぬる事とむつかしくおほさるゝ
物からなけかせ給なるさまもかたしけなく哀なれは
殿に御いとまきこえ給てわか宮くし奉り給て
まいり給へり御覧するたひことにめつらしき
さまにのみねひまさり給をかゝれはあやうきそかしと
まもらせ給にまつ御涙もこほれさせ給ぬいはけ
なくものせられしよりおとゝにもおとらす思ひそめて
しをいまとなりてはいとゝさま〳〵にほたしをさへ
ゆつりてしかは所せきよはひのほとをもいかにして
」（一〇丁ウ）
やかてとこそ思ふをいとほいなくいとひすてらるゝ、
さまにきくもいとたうとき事にはあれと又うら
めしきかたにはすゝみてなむとの給はするもいと
かたしけなけれはいかなりけるひかことゝもをきこし
めされけるにかさらに思給かけぬ事をかくもてさ
はかれてやまかへるなといふなもとまり侍ははした
なきやうにそ思ひ給へられ侍なとすこしうちわらひ
給へるあい行そこほれ給へるわか宮の御ありさま
を見奉りすてゝはかきりの道にもいかてかなと申給
おほやけわたくしの御物かたりれいのこまやかにて
」（一一丁オ）
日もくれぬれはいて給まゝに入道の宮の御かたに
まいり給へり宮も御念すたうにおはしまし

けれはやかてそなたのみすのまへにちかくさふらひ
給をすけ侍程にて御ありきもいとゝありかた
けにうけ給を思ひかけぬほとにはいかてかとき
こゆれはなとてかつねよりもかたくもあらん又い
たゝのはしよいかにかやとてみすをひきかつき
給へは人〳〵もみなすへりいりぬるに見やり給へは
御経はこもあきたるへし法花経なるへし巻〳〵
あまたちくのもとまてまきよせて御すゝは」（一一丁ウ）
けうそくにそうちかけられたるしきみのかうの香
はなやかなるにさま〳〵のうつしのかとももてはや
されて哀になつかしきにもありしよのてさくりまつ
思ひ出られ給てたゝいまさしむかひ見たてまつら
まほしきにれいの涙こほれぬへきけしきにて
つく〳〵と見わたし給へるまみなとつきせす物
あはれとおほしたりとしころはよろつに思ひたち
なからも思事ひとつにせかれつゝすこしゝをありし
夜の後はいとゝすゝむる心ちしてひとへにおもひな
りしかとうきはかきりもまことにあるましきにや
」（一二丁オ）
けふまてもおなしさまにてきかれ奉るこそはつ
かしけれとてなき給へはいてや心うき御心にてこそ
侍けれわか宮を思ひきこえさせ給はゝさりともいと
さまてのことはおほしめしよらしとこそ思ひ給へしか
行すゑはをのつからかゝるかたさまにつけてえさり
かたくなむきこえさせ給へるさまにも侍ぬへか
める物をいとゝおもはすに心うしとこそは人しれぬ
御心にも思きこえさせ給はめときこゆれはいてや
かひなきかたさまをはさる物にてたゝさはかりたに
おもはましかはたちまちにかくまても思よらしいと、
」（一二丁ウ）
きゝにくゝいひさためらるなるもいかにほいなくき
かせ給むと思ふのみこそよろつにすくれて口おしく
侍れかゝるかたさまにてさへ御心にたかふすくせ
よなとつきせぬ御涙なりうすにひなる御あふきの
あるをせちにをよひてとりよせ給へれはなつかしき
うつりかはかりはむかしにかはらぬはなやかならぬ
したゑなとのさまかはりたるはなをいとあかす
あはれにかなしくおほされけり
手になれしあふきはそれと見えなから涙にくもる
色そことなるかたかなにかきつけてもとのやうに
」（一三丁オ）
をき給つまこと院（やイ）の女御は五せちのほとにほりかはの
院にいて給にきかしさい院のおはしまし、かたにそ
おはしける大との、もてなしかしつききこえ給へる
さまをさかの院にもいかてかはをろかにきこえさせ
給はむまいて思ふさまにたにしいて給へらはといつこ

にも〳〵御いのりともとり〳〵に御心をつくさせ給へる
さまなと行すゑはしらすたゝいまはいとめやすき
御すくせを見奉り給につけても入道の宮をかくし
なしたてまつりけむことゝ大将殿はなを心くるし
くもつらきかたにも心にはなれすおもひきこえ給
」（一三丁ウ）
まゝにおなし御ゆかりにてあつかひ聞え給ふさまかたし
けなし斎院は女御の御はゝ宮のいまはのきはまて
あはれなりし御せうそこなともわすれかたく思ひ出
きこえさせ給へはわか宮をもかきりなく思ひきこえ
させ給へれはおさなき御心にもとりわきまつはし
きこえさせ給へれとかきりあれはいまは御あたり
ちかくもえまいりより給はぬをくちおしくおほしたり
この女御もかくうと〳〵しからぬ御なからひになり
まさり給をうれしうおほして御文なともとき〳〵
かよはさせ給けり御てなとのなへてならぬにつけて
」（一四丁オ）
もいかならむ世にへたてなく見たてまつらむと昔の
ともにはよそなからにも思ひきこえかはさせ給へり
やよひの一日ころ斎院の御まへのさくらいみしき
さかりなるをつれ〳〵なるひるつかたみくしあけの
まにいさりいて給て見いたさせ給へるに空の色
あさみとりにてうら〳〵とのとかなるに野への霞は
みかきのうちまてつゝむめれとなをこほれたるにほひ
ところせけなるにこのたいのまへなるさくらの匂ひえ
ならぬかたはらに榊のあをやかにて色もてはやしたる
ほとほかの木たちには似すさまかはりておかしく御
」（一四丁ウ）
らむするにつけてもあけくれ見なれさせ給しふる郷
人のやへさくらいかならむとおほしめしやらるひとへを
たにいまは見るましきそかしと花のうへはなを
くちおしき御心のうちなり
ひとへつゝにほひをこせよやへ桜こちふく風の
たよりすくさすなとおほしめすもまちとをなれは
女御とのにきこえさせ給ふ
ときしらぬさかきの枝におりかへてよそにも花を
おもひやる哉榊のえたにつけさせ給へりおほしやる
もしるくとのゝさくらはみねのつゝきもかくやとみえて
」（一五丁オ）
ちるもさかりなるもさま〳〵にめてたきを女御はなや
ましき御心ちのまきらはしにもなかめいたさせ給ける
ほとにこのかはら色はめつらしくおほされてすきにし
かたいとゝ恋しくおほしいてさせ給ける
榊葉になをおりかへよ花さくらまたそのかみの
わか身とおもはむなへてならぬ枝にさしかへてそたて
まつらせ給けるおほ殿うちよりいてさせ給まゝに

まつこなたにまいり給てちかき御木丁のもとにて
うへの御せうそこなときこえさせ給にありつる
榊の御まへなるを見給てそのかみの心ちし侍枝さしは
」（一五丁ウ）
おほしめしいつることも侍けるにやときこえさせ
給へは斎院よりたまはせたりつるとの給へはさてはいか
やうにかとゆかしかり給へはありつる御ふみをさし
いたさせ給へりとりて見給まゝにあなおかしけの
御てやとうちゑみつゝうち返し〳〵見給へるけしき
おほろけの人のはつかしけなるをめてたしとおほいたる
さまそなのめならぬけに思ひかけ侍らさりし御住ゐ
ともなりかしあまたのなかにこのちかきやへのをは
おさなくより我ととりわかせ給てしつ心なけに
おほしあつかふめりしをいかにゆかしくおほしいつらむ
」（一六丁オ）
なに事も世中はかりおもはすなる物は侍らさりけり
まいてこれよりとしつもりぬる人はいかなることを
見はへらむなに事も見る人なくてすき給ひなんは
かへりてくちおしきさまにものせられしかは思ひたつ
こと侍しかとひきかへしめのほかになり給にしも
これこそはあるへき事と思ひ給なからなをしはしは
ほいなき心ちもし侍きかしされときのふけふと
なりて思ひ給へるにはいとめやすき御すくせとそ思ひ
給ふる女はたかきもみしかきもたゝ一すちによりて
心よりほかに人にもとかれいはれさるましき心のほとを
」（一六丁ウ）
見えしられ侍かし我心とあは〳〵しく身をくたす
心なけれとをのつからそれにしたかひてあらする人
なくなりぬれは身を心にまかせぬやうにてはて〳〵は
あつかふへかめるにいのちのかきりはとかくみたるゝ心
なくてすくし給へかめれは世に侍らすなりなん後も
あなかちにうしろめたきことにも侍らさりけりたゝ
仏の御かたさまをそむき給へるのみこそ後の世の
ためくちおしきことに侍それも女の御身には斎院
斎宮にさたまり給はすとも三千大世界をてらす
玉の行ゑしらて仏になり給はんことかたくこそ侍らめ
」（一七丁オ）
三十二相もいとよくそなはり給て仏の御よういもくはへ
給へきさまそ見え給へるなとの給ふほとに大将殿まいり
給へれはこの御文見せ奉らせ給てたゝいまの御てはは
かりかく人はたれかある式部卿のうへこそ名たかく
ものせらるれなれと文字やうのこまかにおしけなる
さまなとはなをすくれてこそみゆれかたへは思ひなしにや
いかにとさゝめき給まいてなに事もたくひなき物に
おもひしめきこえ給へる御めにはめつらしくさまことに
のみおほえ給へはうちもをかれすまもり給へりいま

もむかしもかはかりなるはかたくや侍らむとはかり申させ
」（一七丁ウ）
たまへとわか物とみすなりぬるくちおしさはまつ
むねさはけはまいらせ給つ女御は我御身のゆくすゑ
心ほそくおほさるゝまゝに殿のゝ給ことゝもみゝとゝまり
給てこの御ありさまをうらやましうおほされける
この花奉らせ給つらんいかやうにてかとゆかしけにきこえ
させ給へとかはらぬ色の哀のみ心にかゝりて花の色は
いかゝきこえやつしつらむとしとけなけにいひま
きらはし給へる御けはひのおかしさをむかしの御名残
かはらぬ御心にてなまゆかしきかたさまたちましり
たる御なかにそありける大将とのはすくれたる枝をおらせ
」（一八丁オ）
て斎院にもてまいり給へり御まへにはきむの御こと
を引すさひておし（は）ます御木丁よりことのつまはかり
さくらもえきのみへの御そともにくれなゐのうちたる
ふたへおり物にかはさくらのこうちきなとかさなりたる
御袖はかりそ見ゆる女御殿の御まへにゆかしけに聞え
させ給へりつれはとてまいらせ給を見くるしかりつる
ことを見給けるにやと中〳〵しらぬ人よりもはつかしく
おほしめすに御かほいとあかくなりて御扇をさしやり
てはなをうけさせ給とてすこしかたふかせ給へるに
はら〳〵とこほれかゝる御ひたいかみのかゝり御つらつきな
と」（一八丁ウ）
ひさしく見たてまつらさりつるにやさまことなる御
にほひにこそならせ給けれととみに花もうちをかれ
すつく〳〵とまもられて涙のこほれぬへきを人〳〵
あやしとや見むと思ふにしゐてわひしけれはまきらはし
にありつる女御とのゝの御返しの御すゝりのうへにをかれ
たるをとりて見給へといとゝなをかくちかきほとの
心のうちはなをさらにまきれかたしもしやうなとわさと
上すめかしくはなけれとすみつきふてのなかれもあや
しうなへてならすなまめかしきけしきにてかきなかし
給へる入道の宮のあくまてらうたけにうつくしき
」（一九丁オ）
すちはすくれ給へる物をとまつそ思ひいてられ給
へるこの御ありさまのなに事もこよなくおとり
給へりしたにかやうになのめならぬさまにもてなされ
給ける物をとおほすに我あやまちの心くるしさも
をろかならすおほしらるゝなるへし斎宮の御てなと
いつれかすくれて侍らむとえこそ見さため侍らねと
申給へはいつれもおかしけにこそみゆめれとの給は
するもあちきなく哀とひとりこたれていつれも
めやかりける御ありさまともにこそのなかにも
入道の宮は院のとりわきてなへてならぬさまに」（一九丁ウ）
かしつききこえさせ給へりし物をそれしもこの世を

かひなきさまになり給へるこそ哀なれ後の世はしも
すくれ給ぬへかめり心はさきたちなからも先の世の
つとめからにやすかやかに人の思ひたゝさなるすちを
なにはかりふかうしもおほしとるらんこともものし給は
さりけむ物をまきれなくおこなひつとめ給へるさまこそ
うらやましう侍めれ山かへるとやいとゝきゝにくき
なをさへとゝめ侍ぬるよさてもいかなりし御夢そと
たにこそえうけ給はらぬ人こそものゝ哀しる事は
かたう侍けるかきりなしとやいさむる道のつとめは
」（二〇丁オ）

いかてかは神のありかたう哀とも御覧ししらぬやう
の侍つらんつゐには思ふことなかるへき事そと御
覧しけるとかやみかと院なとまて位にやつかむと
まてみなおほしあはせ給へかめれをのつから見きく人
あらはいかはかりおこかましきためしにもならせ給はんと
哀にこそさても心の中は思ふことなくしも侍らし物をと
まことに神の御こゝろよせことならはことさまにてそ
この御ゆめかなふには侍へきとてすこしほゝゑみ給へる
物からなみたはひとめうきたり
はかなしや夢のわたりのうきはしをたのむ心の
」（二〇丁ウ）

たえもはてぬにうき木にあはむかきりよりもかたき
ことゝもかなとしのひてきこえ給へとなやましきさまに
もてなさせ給てよりふさせ給ぬれははしたなくて
たち出給へるに東のすみのまに花みるとて人〳〵
あまたいてたる所により給て君たちさへあまりつゝしみ
給ていまはめも見いれ給はねはいみしくつれ〳〵に
こそなりにたれとの給へは新少将とておとなしき人
物にもかなとこそみな思ひたるけしきとも侍めれは
まいてなにかは見いれきこゆる人も侍らむときこゆ
れは心うのことや物おそろしからてすこし末のなからへ
（きゝくしてイ）
」（二一丁オ）

くやしくこそ思ひいてられなといつとなくいひたはふれ給て
みかきもる野への霞もひまもなくおらてすきゆく
花さくらかなとわさとなくいひすさひ給へは少将
花さくら野へのかすみのひま〳〵におらては人の
すくる物かはさまてはなむてういさめ侍らんときこゆ
れはうちわらひ給てひとりしもおほしとかむるこそ
いとうれしけれさらはいかゝすへきこの東のたいに
むかしもさる事ありけるはとの給へはあふにしかへは
かはかりの身はまいてなにかおしく侍らんこの世のめむ
ほくにこそなとわらゝかにたはふれきこゆるをわかき
」（二一丁ウ）

人〳〵はあいなうあせあへてそきゝけるさきの声あまた
きこゆれはたれならむとおほすにかの物いひあしかりし
大納言はこの院の別当そかしそのおとゝの新中納言宮

の中将といひしもいまは宰相中将とそいふかしそれ
よりしものわか君たちなとまりもたせてまいりたる
なりけり花のためになさけをくれたることなれと
なにとなく心ゆきて見ところあるなりなとの給て
いつら〳〵との給へは色〳〵のすかたともぬきこほして
あしもとしたゝめつゝあまたうちむれてあゆみ出たり
わさとなくみすのうちよりそ所〳〵もりいてたる袖
」（二二丁オ）

くちともなとれいの事なれとうちわたりのこのましく
しなしたる御かた〳〵よりもなをこよなく心にくゝゆへ
ふかく見わたさるれは心ことなるよういともにて花
のしたにてさまよふすかたともいつれとなくおかしき
なかに宰相中将は大将殿のしゐてすゝめさせ給へれは
わか〳〵しきわさかなとはすまへともけに人よりは
ことになまめかしきさまかたちにてかすもこよなくお
ほくあかるを大将とのなともいみしくけうし給て
やゝもせはおりたちぬへき心ちこそすれなとていま
しはしわかくてあらさりけむとの給へはみすのうちなる
」（二二丁ウ）

人〳〵まめ人の大将はおりたゝせ給はすや侍けるさらは
しも花のちるもおしからしなとくち〳〵にたてまつらま
ほしけなるけはひともなりそのいたうくつしたる
名さしこそよそへつへかなれとこよなく見くらへ給
はむかねたけれはとてうちゑみ給へるあいきやう
花の匂ひよりもこよなうまさり給へる花のいたう
うち散かゝるを見給てかうりたまかへりてあとなき
いふかしとしのひやかにくちすさひ給てかうらんに
をしかゝり給へるまみけしき御声なとはかのさくら
をよきてとて花のしたにやすらひ給へりし御さま
」（二三丁オ）

をそのおりはおかしと見しかとこの御ありさまは又たくひ
なけにそなにことのおりにも見ゆる日くれぬれはみな
のほりぬるにいつしかと夕つく夜さしいて、木末も
いとゝおもしろく見わたされたりさま〳〵の御ことゝも
みすのうちよりいたさせ給へはとり〳〵にゆつり給つゝ
大将はてもふれ給はぬを大納言あるましきことゝて
きむをせめて奉り給へはこの御まへにてはさらに
めつらしけなく中〳〵に侍りとの給てたゝあふきうち
ならしてさくら人うたひ給こゑのおもしろさにまさる
ことそなかりけるおかしき程にしはしあそひて人〳〵
」（二三丁ウ）

まかて給にをり物のほそなかこうちきなとをの〳〵給
はせたり大将もいて給おなし十よ日一品の宮に
れいの物すさましくてなかめふし給へるに日ころかた
らひ給ふことある人のまいりあひてこよひなむさりぬ
へきときこゆれはいかゝはせんいとかう物むつかしき

心もすこしなくさみもやするとそなたさまにやらせ
給うす霞にもりたる月影さやかにはあらぬしもいと、
物心ほそけなる空のけしきを道すからなかめつゝも
思ひたちしほいはやかてたかひてやみぬへきにやかの
あきらかなりしおもかけはさりともたのもしかりしを
」（二四丁オ）

なそやかくよしなしありきもかすつもれはいとあるまし
きことそかしとおほしいつれは物すさましくなりて
ひきかへす心ちし給へはしはしをしとゝめさせ給へるに
ついち所〳〵くつれて花の木すゑともおもしろく
見いれらるゝ所ありみちすゑめしていかなる人のすみか
そとゝはせ給へは故式部卿の宮にさふらひ宰相の中将も
こゝになむおはすると申せはいますこし御心とまり
てちかうやりよせて見給へとかとはさしてけり
風にしたかひて柳のいとおきふしみたるゝに花の
こすゑも見るまゝに残りすくなけになるはいと見
」（二四丁ウ）

すてかたきにひわしやうのことひきあはせてそあ
そふなるありさまもおかしきわたりなれはおり給て
くつれよりやをら入給てことのこゑするかたにたつ
ね入給へはしむてんのみなみおもてのはしかくしのま
一まはかりをあけて人はあるなるへしちかきすいかい
のつらによりてきゝ給へはひわはたゝこのすのもとにて
ひくなりけりしやうのことはおくのかたにそきこゆる
これや姫君ならんとみゝととめ給へるに入道の宮
の御ことをたくひなき物に思ひきこゆるにこれ
やいますこしあいきやうつきおもしろきことはすくれ
」（二五丁オ）

てやとまてきこゆるにいとゝ御心とまり給ぬれ
と心とけてひき給はてやみぬるはあかす中〳〵なる
によろついとゝゆかしうなりぬれとすこし物の
けしき見ゆへきやうもなけれはかへりいて給に
西のかたにいとおさなきこゑにてうろむろほうなと
すんするこゑのいとうつくしうきこゆるは宰相の
おとうとのほうしになるへしときこゆるなるへし
かうしのひまより火のかけ見ゆる所をなをあかてや
をらたちよりてのそき給へは木丁ともあまた見
ゆれとをしやられなむとしておくまて見とをされ
」（二五丁ウ）

たり帳のまへにけうそくにをしかゝりて経よむ人
三十にはたらぬほとにやと見えていみしうけたかう
あいきやうつき見まほしきさまなとこゝら見つもる
人にならふへうもなししろききぬともにうす色
なとのいとあさやかにあらぬをきてかほなともつ
くろひたるとは見えぬに心よりほかなるかみのかゝり
いろあひなとまことしうおかしけなるをさはひめ君

ならんとおほすへけれとさすかにきくとしのほとゝは
いふへくもあらすもてなしなともおとなしくやす
らかにてこの物すむするちこの七八はかりなるを
」（二六丁オ）
経をよみさしつゝいとうつくしと思ひてうちゑみて
見給へるけしきなとも中将のはゝにやとみゆるに
あまりわかうおかしけなるを猶いとあやしと見給
我御はゝうへをこそたくひなくめてたき御あり
さまと見奉り給へるにさはかゝる人もある世にこそ
とおほすにこれに似給ていますこしきひはにわか
からむ姫君の御ありさまはわかおもふことのかなふへき
にやとうれしきをはさる物にてこのみる人をも見さし
ていつへき心ちのし給はぬをあり〳〵ていとかた
くなしきわさかな我としのほとよりもおとなしき宰相
」（二六丁ウ）
中将のありさまをなとおもひあはせ給にそいとにけ
なうあるましき事かなとひとりゑみせられ給ひける
　おり見はやくち木のさくらゆきすりにあかぬ匂ひは
さかりなりやとひとりこちていて給も我なから物くる
おしくそおほしらるゝ心さし給へるところは致仕
の大納言ときこゆる人のたゝ独かしつき給御む
すめかきりなくおかしけにて斎院になむすこしに
たてまつり給へるとうへの御かたにふる人にて右近
の君といふ人のかたりきこえたるをきゝ給てかしこ
にもさるたよりありてしたしうかよへはほのかにみせ
」（二七丁オ）
よとせめわたり給をおやたちしらてはさすかに
ありかたきにこよひはさりぬへくやありつらん
あないきこえさせたるなりけりなかやとりに心
とまり給ていとゝ物うくおほさるれと猶まこと
にやと見あらはさまほしきかたもあれはえすきやり
給はすつたへ人のもとにせうそこいひ入給へるに
たゝとういらせ給へときこえたれはいり給ぬ人めなき
かたより帳のうしろにみちひきいれて火なとおほ
つかなきほとにはあらすなしたるにけにおかしけなり
とはいひつへかりけれとかけても思ひよそへ奉り
」（二七丁ウ）
つへきかたはなかりけれはいとすさましくていて
給にけり夜もすからおもはすにありかたかりけるおも影
はわすれ給はすおほしあかしてもかうよつかぬ心のうち
をもけにしらせぬかいとくちおしけれはなくさめかてら
れいの姫君の御かたにきこえ給やうなれとことさま
の心もそひたるなるへし
　ちりまかふ花に心をそへしよりひとかたならすもの
おもふかなとかやうにてそきこえ給折しも宰相中将
まいり給へるをさま〳〵おほしはなれかたきゆかり

なつかしくてつねよりもこまやかにかたらひ給つゐ
」（二八丁オ）
てにもことのねきゝしさまはいはまほしけれと
思かけぬほとのありきしけりときかれしいまより
のちもさるへきひまあらは見さためてまことしう
おもひさためんなとおほせはいひもいて給はす中将の
かたちのいときよけなるはほかけにおほえたるなりけりと
おほしいてられてうちまもり給もいかてかはしらんさて
もきこゆる事はきゝ給はてやみぬへきかむすひとゝ
むとかやありしひとことにけふまてなからふるをなとか
おなしくはたすけ給はぬまつこのせむしかき中〳〵
心やましうはらたゝしとよ人のゆるさぬあたりに身の
」（二八丁ウ）
ほとしらぬ文なとのおちゝるはおこかましきことゝも思ひし
かと身のうへになりてはさりとてえ思ひやむまし
きわさなりけりとていとつらしとおほしたるけ
しきまことしうおほしなりにけりと見るは人し
れすうれしけれと心ひとつにはえまかせ侍らねははゝに
侍人につねにかやうにものし侍れとあさましくふる
めかしきありさまをなに事につけてかはおほしかす
まふはかりはあらむさる物から心つからの物思はいかはかり
くやしく我心にもつらきかたに思なしきこえさせてん
ほいなうなとつゝましけにのみものし侍るをさしも
」（二九丁オ）
あらしなとあなかちにすゝめ侍らむこともいさや御心の
わつらはしけれはこそせむしかきはのたまはせぬさきにも
いみしういなひ侍れとみつからはいとつゝましきこと
に思てさらはきゝ侍らぬにおい人もおこなひにいとま
なしたゝやかてきこえさせよとのみゆつられ侍そや
いまよりはさらに〳〵なときこえてまめやかには女こそ
人のもちて侍るましけれおやの心をみたることもをのこ
はさしも侍ましかりけりこ宮のかくれ給しおりやかて
かたちをかへてみやこのほかのすまゐに思たち侍
めりしかとおさなく侍りしおりかゝるかたちの人を世に
」（二九丁ウ）
しらすおちてかくなんときゝてのちはたちもはなれす
なきくらし給しかすか〳〵ともえそむきやらす又いつ
こもおなしさひしさといひなからも山のあなたの
家ゐにも心くるしきさまをひきこめむもいかゝ
なと思ひたゆたひすくし侍ていまはまた春宮に
故宮のけいしをき給けることもありなをさやう
なる谷のした水にはなさてをとのみ中宮よりせめ
のたまはすれとうしろ見なき人のましらひはおもひ
たちかたかるへきよしをきこえさせなからもまたけに
さのみいひてもつゐにはいかゝなとやうにたゝこの
」（三〇丁オ）

ひとりのありさまをあけくれのなけきにてすか〳〵
ともこの世をそむきやり侍らぬにこそいかにも〳〵見
さためてはやかてこもりゐなむとをきてをきたる
所も侍めりさりともましてかたのやうなるあり
さまに見をきてむ心やすくふと見はなつはかりの
事はいとありかたかるへけれはなをなかき世のほたし
とはなるへきに侍らめおとこにて侍はつかさ位なと
いふこともめやすきさまならねとたゝおほやけの
おほしすてぬをかしこきにてをのつからすこし侍ぬへ
かりけり世中にすてられなは出家をしてもこの世に
」（三〇丁ウ）
こそ思ひいてなから仏にならん事をおもへはやすく侍
かし女のおもひかしつく人なくさるましきありさまを
して身を思ひむすほゝれんを見侍らはいかはかりは
やすからす思ひ給へきとて涙くみぬへきけしき
心ことにおもひをきてたるいもうとの君と見えて哀
なり春宮になむとおほしをきてんをかけてたに
かうきこえさせぬはいとひんなき事にこそ侍けれ
さはされともそのおほしたらんみやこのほかの御あり
さまにましらひに見はなちきこえ給ひてはありかた
くこそ侍らめかうま心なるうしろ見まうけ給ては
」（三一丁オ）
後の世の御つとめもまきれなくこそものし給はめ
かの御ためやすしとまてこそおほされさらめたゝさる
かたにうしろやすう心やすきかたにはなとてかはと
こそ思ひ侍れとそのおほしうたかふらん後のくやしさ
なとはいさや心をはかる物ならねは我なからしりかたう
侍れと人をも身をもかへり見ぬあた〳〵しさなとは
ならはぬ事なれはなとかさしもあらむなとこそ思ひ侍れ
ひか〳〵しきまて世を思ひ捨てきゝにくきまてたれ
にもてさはかれ奉るありさまなとはきゝ給ふらんなまれ
〳〵かう心いれてきこえそめてむ事を名残なき心の
」（三一丁ウ）
ほとなと見えたてまつる程はいかてかあらん見ゆつる
かたなく心くるしからん御ありさまを見そめはおしからぬ
命もあやうくなとそおほえめとこまやかにかたらひ
給へはいてやまいて宮へまいり給はんことはおもひかけ
侍らさめりあまり心やすけにの給はする御心も
かすならさらむ人はいていかゝはといみしうつゝましう
思ひ給へらるゝ宮の御ためをろかなるをためしにいひ
いつるそあちきなきや道しはの露は袖にかけ
給はぬひまなく忘給はさめる物をまことありつる
御返もちてまいりたるを中将見てさりやかうのみ
」（三二丁オ）
ひまなからむにはいかゝとわつらはしかるもおかしくて
ひきそはめて見給へは

ちる花にさのみこゝろをとゝめては春よりのちは
いかゝたのまむとあるはよへのほかけのなるへしいと、
つゝましけにきこえなとはせてひとゆきにひきわた
されたるふてのなかれもしやうなとこれを上すとは
いふへきそかしと見えていとめてたしなに事も世に
すくれたりける中将ほのみてすかせ給にこそ侍けれ
いとふるめかしきせんしかきはまたむつからせ給ぬへかめり
と」（三二丁ウ）

いふもいとしたりかほなり四月ついたちに院の女御
いたうもなやみ給はて女みこうみたてまつり給へり
おなしくはなとかとさかの院にはいとくちおしくきか
せ給へとうちにはいかにも〳〵またならはせ給はぬ
ことなれは御はかしやなにやとあつかはせ給もたゝ
いとめつらしくうれしき事にそおほしめしたる御
ゆとのゝきしきありさまこゝぬかの夜までの御うふやし
なひともかきつゝけすとも思ひやるへしよろつ殿
大将殿なとのもてはやしかしつき聞えさせ給へる御
ありさまなのめならねは思ふさまならぬ御事ともみえす
」（三三丁オ）

めてたき御すくせとのみ見ゆうちにはいと心もとなく
ゆかしくおほしめしつゝとく〳〵とのみの給はすれは
御いかほとにまいり給ぬいつしかとめつらしき人
見たてまつらせ給にめなれたらん人のめにたにかゝる
たくひはありかたくやと見ゆる御うつくしさなれは
まいて時のまもめはなたせ給へくもおほしめされす
御ひさのうへにて日くらしまもりきこえさせ給つゝ
らうかはしきことをさへもてあつかはせ給へる御け
しきかたしけなくめてたきにまいておもふさまにもて
ものし給へましかはと女御はなをあかすくちおしう
」（三三丁ウ）

おほしけりもとよりたにとりわきたりし御おほえ
なれはたゝこの御かたにのみおはしますを御かた〳〵には
やすからぬ事におほすへしいまゝてきさきにゐ
給はさりつるに女一の宮の御めつらしさにいまはたれ
かはおほしきしろはむとてつゐに院の女御ゐ給ぬ
うちつゝきかすかの神もいかゝおほさむと世の人はなや
めとそれによるへきならねはやかてほりかはの院に
いて給ぬ御しつらひありさまもひきかへし宮つ
かさともさま〳〵になりなとしてめてたき御ありさま
なともつねのことなれとめにちかうみることにはなを
」（三四丁オ）

女子をかやうにて見さらむはいけるかひなうもあるへき
かなとそおほえける春宮の御はゝ宮をは皇后宮とそ
きこえさせける七月すまいのころそいま中宮きしき
ことにてうちにまいり給ける春宮には御けむふくの
夜まいり給し右のおとゝの御むすめ麗景殿の女御

ひとりそさふらひ給もこよなくおとなひ給て御あそひ
かたきにはあらすやおほさるらん大将殿のいたくきこえ
給ひめ君の御こといまより御心にいれさせ給へれ
とまたいとまちとをなるほとにきかせ給そ心もと
なくおほされける式部卿のひめ君をこ宮のかならす
」（三四丁ウ）
御覧せさせんと申をき給てしをおとなひさせ給
まゝにおほしわすれすなから御心ひとつにはえおとろ
かさせ給はさりしには、宮もちこかほのよにしらすうつ
くしうものし給しをいかやうにおひなり給へらんなとの
給はせいて、宮にもきこえそゝのかせ給て御文なとは
つねにたてまつらせ給なりけりかの宮にもかゝる
御せうそこなとをことの外にもてたかへても又たの
もしき御ゆかりなともなき御身なれはいかやうにかは
もてなしきこえむなとはおほしなからもさては我御
ほいのむけにたかひはてぬへきをいかさまにかはとおもひ
」（三五丁オ）
みたれつゝをくりむかふる年月のみすきつゝ姫君もやう〳〵
さかりになり給まゝにみかと春宮ときこえさすとこの
御ありさまになすらひなるへきやうも見え給はぬを
大将殿ほのめかし（に）給てほとへぬるに見せたてまつり
給へその御かたちはかりやにつかはしからんと宰相中将
はねにきこえさせ給へとさすかにわさとおりたちたる
御心さしとは見えすともすれはにしの山もとに心をかけ
給てよとゝもにあくかれ給をきく〳〵なをいとあやうく
つゝましき心ちしてすくし給にそのとしも過て夏の
はしめにもなりぬまたしきに五月雨かちに物むつかしき
」（三五丁ウ）
ひるつかた大将殿春宮の御かたにまいり給へけれは御て
ならひなとせさせ給て色〳〵のかみふみなととりちら
されたりかやうの物はなとか時〳〵見させ給はぬいと
うるさきこと、もにはめしまつはしてとえむしきこえ給へは
なまはつかしとおほしたるけしきにて中〳〵ふともとり
かくさせ給はぬにむらさきのしきしのなへてならぬさ
ましたるかむすひめなともた、いまのと見ゆるをゆかしかり
申給へはえおしませ給はて式部卿の宮にきこえよと大
宮の、給しかはをしへつるま、にやりつるとてたまはせ
たりせむしかきいかにはか〳〵しき事をしへ申つらんとて
」（三六丁オ）
わらひ給て見給へは
　のとかにもたのまさらなむ庭たつみかけ見ゆへくも
あらぬなかめをとにや所〳〵ほのかなるすみつきさたか
ならねとうへのにいとようおほえたるか思ひなしにや
いますこしわかやかにらうたけなるすちさへそひて見
さりけることさへくちおしう打をきかたうおほさる、事
かきりなしまたいとおさなけなる御てなとも中〳〵

心やすきかたにてもことはりそかしとおほす物から
かはかり見ところおほかりけるをいまゝて見せ給はさり
けるそいとうらめしきこれはいとおかしけに侍ける
」（三六丁ウ）
物かなむすめのてほんにとらせまほしう侍れとあは〳〵しき
やうに侍とてまいらせ給つかくなにこともめてたき人と
御覧しそめてはおほしめしおとさむと思ひ給ふるこそ
いとからかるへけれとけいし給へは御かほうちあかめて
これはまいらせんともなかめる物をとてなまくるしと
おほしたるをあなおさなの御さまやとおかしうみたて
まつらせ給御すゝりかみなと申給てひきそはめて
かい給はやかてこの宮へなるへし
いつまてとしらぬなかめの庭たつみうたかたあはて
我そけぬへきことはりしらぬをなくさめわひてなむ
」（三七丁オ）
くちおしやをたえのはしはふみゝねと雲ゐにかよふ
あとそひまなきなとかい給ふをいつくへそ給へ見むとは
の給はすれとうちさくしりてひきはいなとはし給はす
いまよりいとうるはしうけたかき御心はへなるにこの
殿をはいとうちとけかたうはつかしき物に思ひきこえ
させ給へるいとすけなくて世中のありにくゝのみ思ひ
給へらるれはいかゝはせんとてなま女の哀としつへきあ
ないしりてかたらひより侍そとけいし給へはいみしう
わらはせ給かうまいりたるおり〳〵ゆさるへきふみとも
とりいてさせ給つゝ学生ともなとのしとけなうならはし
」（三七丁ウ）
きこえたるところ〳〵なをし給心えすおほしたるもし
なともこまかにいひしらせたてまつりなとし給へはけふも
あまたの文ともとりちらしつゝおもしろうちすむし
つゝならはしきこえさせ給にくら人まいりてけしき
たてはありつる返りことにやとおほしてたち給
へるにそれなりけれはかくれのかたにてひきひろけ
給へるを物いひさかなの権大納言ふとさしのそき給へは
ひきかくし給をれいのめさとは見てけりかゝれはそかし
とうめきかゝるをこれはあやめ給へきにもあらす
むすめのひとつかきなれはちらさしとての給ふを
」（三八丁オ）
水あさみかくれもはてぬにほ鳥のしたにかよひし
そこもみしかは物いひのうしろやすきはおほしいつる
こともあらむをたゝやは見せさせ給ぬとむつれよりて
せちにさかすをさていひちらしてわひしきめはたれか
見するそといはまほし
とりあつめまたもなき名をたつる哉うらやのをかに
かりせしやきみたゝすの神にもうれへまつらまほしき
物かなとてこれはれいのせんしかきと見給へれはあな
かちにゆかしからてこま〳〵とやりてさしやり給へるを

ねたかりつゝたつさまもひとへにはなやかなる人さまにて
」（三八丁ウ）
にくからす庭たつみ見給てのちはいとゝほかさまにきゝ
なしたらんことくちおしきをむつましき御中にて
皇后宮なとまことしうの給はせは思ひつゝむかたおほ
からん我かたさまにはよに思ひならしとおほすもくち
おしきをいかやうにかおほいたると御けしきもゆかし
けれは皇后の御かたにまいり給て物かたりなときこえさ
せ給つゐてに宮のおとなしき御心つかせ給て式部卿の
姫君にきこえさせ給事なとけいし給へはこ宮の
たゝこのきみのことをのみ返〳〵いひをき給ひしかとよそ
なからはその心さしのしるしもなきをおなしうはさやう
」（三九丁オ）
にてなときこゆれとかのは、君はいかにも〳〵たゝうしろ
やすからむ人におやさまにあつけて我はあとたえたる
すみかにこもりゐなむとの給なるは中〳〵におほかた
ならむましらひはときくをこのふる人ものたくひなかり
しちこさまいかにおひなりてなとかたりきこえさせ
たれはわかき御心にはゆかしうおほしたるとこそあめれ
けにこそさはかりのちこは世にあらしと思ひいてらるれ
いかてたゝむかへとりてしかなとの給はするさまもおも
はぬかたになしきこえたらん人きゝもひんなう御心とも
にもいかゝおほさむといと〳〵おしかりぬへけれとかうのみ
」（三九丁ウ）
なのめならぬありさまをむかしより聞ゝそめてつゐに
見すなりなむはなをいとほいなかるへけれはかうねん
ころにおほしたること、見てのちもえおほしたえさり
ける御ふみはわさとの御つかひたてまつり給はむも
きしろひかほなりぬへけれはたゝ宰相中将のもとに
ひまなくせめをこせ給つゝそのなかに入給ける春宮より
御つかひまいりぬとみをいたまふていて給まゝにれいの
こまやかにそうらみつゝけ給へるなかに
くらへ見よ浅まの山のけふりにもたれかおもひの
こかれまさるとさりともたくひあらしとこそ思ひ給へ
」（四〇丁オ）
らるゝをけふはかりなをとりたかへても給はせよかしと
ある御かきさまはしもけにたくひなけなるをきこえ
かはし給へらむもにけなかるましけれとさしはなちかたき
御返をまつ〳〵とすゝめつゝかゝせ奉り給程に又いかゝさま
さまきこえ給はむとてれいのうへそかい給ふ
あさましや浅間の山のけふりにはたちならふへき
思ひとも見すとそありける宰相の君はなをさはれ
いたつらになしきこえつるとおほしないてかうまことしく
の給おりにゆるしきこえ給てよ春宮にはこの殿の
御むすめとて一品宮におひいて給ふひめ君いまより
」（四〇丁ウ）

心ことに思ひきこえ給めるいま二三年すきはまいり給
なむなりそれにはいみしうともきしろひきこえ
給なんやさやうの御ましらひはあらぬまてもかみなき
くらゐにやなり給はんのたのみをかけてこそうち〳〵の
くるしさをなくさめてもすくし給はめ思ひかくましく
てはなにのかしこかるへきそ又をのつからかやうなるさま
上達部のはしはたすきまなきやうにてもなをいとくち
おしき御ありさまにこそ侍めれこの御ありさまは一品宮
おはするにてもうち〳〵の御心さしなとを見侍になと
かはとこそは見侍れよその思ひやりよりは物わすれなと
」（四一丁オ）
し給へくもなき御心をたゝ時〳〵にてもうちかよひ
給はむはいけるかひあるわさかなときこえ給をけにさ
もやなとおほしよはる夏かたよりはゝうへなやましけに
し給をれいもあつけにはさのみこそはと見奉る人も
みつからもおほしとかめぬにうらめしき風のけしき待つけ
給てしもいかゝくるしかりまさり給て物心ほそくおほ
さるゝまゝにたゝ姫君の御ことをおほすよりほかのことなし
さるへきさまに見たてまつりをかて我さへたちまちに
なうなりなはいかにし給はむと宰相もわか身ひとつ
たに人にまかせられ給へりいみしう思ひきこえ給とも
」（四一丁ウ）
いかゝはし給はむとおほしつゝくるかいとかなしければは
一日にても我みる世に大将にやゆるしきこえてましある
人〳〵の心もうしろめたきをとくるしきにそへても
おほしいそくこともあるをしり給はて大将殿よりも御
心ちのことなととふらひきこえさせ給て
ひとかたになりなはさてもやむへきをなと二みちに
おもひなやますとあれとくるしうし給ほとにて御かへり
なし日にそへていとよはうなりまさり給へとたゝ
この御ことを見をかむとよろつまきらはししのひ給て
こと〳〵しからぬとおかしきさまにおほしをきつれとなを
」（四二丁オ）
えまちつけ給ましきにやかきりのさまに見え給へは
あまになり給ぬいとゝわかうおかしけなる御ありさまを
さふらふ人〳〵もさかり御身やつし給へらん心ちして
あかすかなしきに姫君はやかてのわかれまてもおほしよらぬ
にやかなしさもたくひなけにおほしまとひてなきしつみ
給へるを見給てもまいてあとかたなう見ない給てん
のちの御ありさまおほしやらるゝに猶いと見すてかたき
心ちし給大将殿かくときこえ給にもやつしかたかりし
かたちおほしいてられてかはらぬさまを又見す成ぬる
ことくちおしうおほえ給けり宰相の君のもとにあはれ
」（四二丁ウ）
なる御とふらひねんころにきこえ給てれいの御文とも
あれはやかてとりくしてうへの御かたにまいり給へり

いむことのしるしにやけふはすこし物おほえ給さまなれは
かくなんと見せ奉り給にけにあくまてなさけありぬ
へかりける御心さまをくちおしう見奉らすなりなん事
よとよはけなからの給ふいまひとつの御文には
　我のみそうきをもしらてすくしけるおもふ人たに
そむきけるよにとそありけるかうつねにの給をき
こえてのみあるも物おもひしらぬやうにおほすらんかしとて
姫君の御かたはらにおなしさまにてのみふししつみ給へるを
」（四三丁オ）
この御返きこえ給へうしろやすう見をき奉りてのち
かたちをもかへかきりの命もたえはてんとのみこそ
思ひ給へれとかなはぬわさなれやつゐに見たてまつり
をくともなくてやみぬへきをおもはすなるありさまにて
人にもあは〳〵しき心のほとをしられ給はむよりは侍らす
なりぬともこの人の御もてなしにしたかひ給へなとそ
おもひ侍れはかう見侍おりにこと〳〵しからぬさまにも
きこえならひ給へかしと思ふなりと御くしをかき
やりつゝきこえしらせ給にいとゝ涙のみなかれいて、
おきもあかり給はねはすゝりなととりよせさせ給て
」（四三丁ウ）
かしらもたけつゝなをなときこえ給へはなく〳〵おきあ
かり給へるつらつきかみのかゝりなとよりはしめたゝよそ
人にてたに見そめてはかきりの道のわかれもえゆき
やるましけなる御さまをまいていかはかりかはうしろ
めたうかなしくおほされけむ
　うき物といまそしりぬるかきりあれはおもひなからも
そむきぬる世をなとやうにかたのやうにていたし給へれは
まち見給ところはめつらしきけにやいとゝ見てはえ
やむましうしつ心なきまて御心にかゝりまさりけり
又たちかへりきこえ給へれとけさはすこしひまある
」（四四丁オ）
さまに見え侍つれとなをたのみかたけにみえ侍れ
はきこえさせし山てらにたゝいまわたし侍になと
宰相そきこえさせ給へるかめやまのふもと慈心寺
なといふわたりにこ宮のいかめしき寺たて給てとも
すれはこもりつゝふたんの念仏なとおこなひ給をこの
秋は御心ちくるしうてえわたり給はさりつれは九月
にたにまきれなう念仏もしてやかてきえもはてん
なとおほしてわたり給けり葛はひかゝる松かきの
けしきもひさしう見給はさりつるほとにいとゝさひし
さまさりにけるをいとゝかれはてなむころほひいか
」（四四丁ウ）
やうになかめすくし給はんとみすなりなむ世のこと
のみ心にかゝり給てうしろめたうい みしうおほさ
るゝにいかてかうしもおもはしさりともむけにいたつらに
なり給へきありさまにはあらぬ物をわか身のゆき

まとはむ道のほたしはいといみしかるへきをと
かつはおほしなくさめつゝ四十九日はしめ給て日くに
哀にたうとき事ともをきゝ給まゝになとて年比も
たうとくかやうになりてつみをすこしもうしなはさり
つらんとくやしけれはくるしきもせちにねむしつゝ
おこなひ給つゝ露よりもさきにやと見ゆるおり」（四五丁オ）
かちになりまさり給大将殿は日ことにねんころに
とふらひきこえさせ給ありかたくうれしき御こゝろと
よろこひきこえさせ給にみつからもしのひてわたり
給へり宰相もあからさまに京にいて給にけり
廿日なれは月さへをそくいつるころにてことゝふへき
かきねもおほつかなけれはこゝかしこたゝすみつゝ見
めくり給にいとおほきなる堂ともあまたありて
三昧つとめおこなふけしきたうとけに僧房とも
あまたつゝきなとはせてこゝかしこ竹のはやし
はかりをこくらうしないつゝなかき世のすみかとおもひ
」（四五丁ウ）
たるもめとまりて哀にうらやましうおほさる
山よりわつかにおちくる水ををの〳〵竹の一もとを
くもてにまかせやりてまちうけたるさまもこほりの
くさひかためたらむころほひはいかゝと心ほそけ
なるさまかきりなしゐ給へき所と見ゆるは
寺よりはすこしのきてそありけるおひにせるほそ谷
河のをとさやかになかれておなしき岩のたゝすま
ゐも心あるけしきしるくときおりふしの花紅葉
の木ともゝかすをつくしたるとみえて見所おほくそ
しなされたりけるされとあさちかもともことに」（四六丁オ）
たつぬる人なかりけると見えて心ほそけに色を
つくしてみたれあひたるせんさいともに露のしら玉
のみ所えて虫のねは外よりはみゝのいとまなかりけり
軒をあらそふ八重むくらもけに人こそ見えね秋の
けしきはとてしられぬへかりけりいなはの風もみゝ
ちかくはきくならひ給はぬにいなおほせとりさへをと
なふもさま〳〵さまかはりたる心ちして物心ほそけ
なりされとこゝには人のあるけはひもせて九体の
阿弥陀おはする御たうにやかておはするなりけり
堂のかさりなとも極楽もかうやとおもひやられて
」（四六丁ウ）
いときよらにたうとかりけるをなとていまゝてみさり
さらんとくちおしはうともにこほうしはらのもの
すしなとするこゑ〳〵はかりほのかにきこえてれいなら
すわつらふ人のあたりともおほえすしつかに心ほそけ
なりせんほうのあみた経なとのこゑはかりそきこゆる
人のこゑする所に道すゑよりてかくなときこえさす
れはおとろき給てやかてふし給へるも屋のみすの
うへにしとねさしいてゝいれ奉り給へり月はなけ

れと星のひかりにけさやかなるに軒ちかうていたう
たと〳〵しきほとにもなれはおほかたの御やうたい
」（四七丁オ）
たちふるまひ給へるさまなともふとあなめてたと
見え給へる風にしたかひてくゆり入たるにほひさへ
けにこそはなへての人にはにたまはさりけれとよろつ
思ひやりきこゆるよりもいますこしめてたうはつかし
けなる御ありさまを見給にはさもやなとおもひより
けるもおほけなくいとつゝましうおほえならるゝ物
から又かゝらん人をこそとしのわたりにも待つけて
見るへかりけれありつる世になとちか〳〵しき御あり
さまにもてなしきこえなりぬらむとくるしき
御心ちにもいとゝむねさはきまさりてせちにかしら
」（四七丁ウ）
もたけてそ見やり給日ころもいかてかと思ひ給へ
なからもさはること侍ていまゝてなり侍ぬるも心の
うちよりはをろかなるさまやと月もまたすいそき
侍てあさましうたと〳〵しう思ひ給へられつる道の
空かなゝとの給けはひもかきりなき物におもひ
きこえ給宰相の御ありさまなとにはよるへくそな
かりける人つてにきこえ給はむもいとかたしけなき
心ちし給へはせちにためらひ給てすこしまとひよりて
たひ〳〵とはせ給ふをたにをろかにかならす思ひ給ふるに
わさとたつねいらせ給へるを見侍にこそけふまてなか
」（四八丁オ）
らへ侍にけるもうれしくとの給はする御けはひ
いとよはけな（に）るしも見しおもかけにかはらすわかうお
かしかりけるをいとかゝらさりつらんほとをきかす
なりにけるもくやしきにつゐにむなしくきゝなし
てむおしかりぬへきさまなれはうちつけに哀もあさ
からすそおほさるゝへにけるとしのつもりにはこれを
はしめに思ひ給へらるへくも侍さりつれとあり〳〵て
かうたのもしけなき御けはひをしもうけ給こそ
すきぬるかたのくちおしさもうらめしさもみつから
のあやまちかほに思ひ給へらるれとてうちなけき
」（四八丁ウ）
給へるけはひなとふしまろひなきまとはん人よりも
あさからぬ心の程と見ゆるをかはかりまてのこゝろの
ほとゝしらましかはとうしろめたうかなしき人の御
ことはまつしのひかたうおほえ給てあるはあるとも
思ひ給はすなからもいとかうきのふけふとは思ひ
侍らてすくし侍けるくやしさをさま〳〵おもひ
給ふるなかにも露はかりも見ゆつるかたなき人の
ありさまのうしろめたきにゆきもやられ侍
らぬをかゝるとをちのさとをたつねさせ給へ
かりけりと見をき侍ぬるこそすこしたのもしう」（四九丁オ）

さるはおなしけふりにたくひなまほしけにそ思ひ
こかれ侍めれはいかゝともつゝけやらすない給
にやときこゆるけはひにたのもしけなきは
きく人たにもいとかなしきをまいてかの御心の
うちともおほしやるそさま〳〵にいとしのひかた
きやことはりの御こと、いひなからあまりさおほし
入たるを見たてまつり給へは御心ちもいと、くる
しうおほさるらん物をなをおほしなくさむへう
こそ人〳〵もをしへきこえさせ給はめなとおと
なしうすくやかにきこえないたまへと」（四九丁ウ）

我もまたますたの池のうきぬなはひとすちにやは
くるしかりけるといひけち給けはひは猶き、し
らむ人にきかせまほしきをまことなる御心のうち
をはいかてかしり給はん

たえぬへき心ちのみするうきぬなはますたの池も
かひなかりけりとにやたえ〳〵にていと心ほそけなるは
中〳〵見をきかたけれとなかゐせんもくるしうや
おほされんとおほせはいまよりはたと〳〵しからぬ心
ちし侍ぬへかめれはつねにもなときこえをい給て
いて給にやかてこのつゝきたるわた殿に人のけはひ
」（五〇丁オ）

するをたちとまりてき、給へはいつ、御との
あふらいまはまいれとそいふなるほかけに見しちこの
こゐにてまらうとはいて給ぬいまわたらせ給へ姫君の
おまへこそといふにこのたち給へるつまとを
ひきあけていりぬるにいとうれしくてやをらより
て見給へは仏の御まへの御あかしのひかりほのかにて
はか〳〵しうもの見えぬにいまそちいさやかなるわらは
火ともしてきたることにしつらひもなくて木帳は
かりありひきよせてふしたるや姫君ならんすこし
のきて人ふたりはかりそゐたると見ゆるほとに」（五〇丁ウ）
この戸のあきたるよりにはかに風あら〳〵しう吹たるに
火のきえぬれはしそくもてまいり給へなといふこの
わた殿は人〳〵のうちやすむ所にてあるにしらぬ人の
けちかう物し給へるかつゝましさはしはしより
ふし給へるなるへし人いて給ぬとき、給へはわたり給
なむとてやをらおきあかりてちこ君をともにて
しやうしよりこなたさ（に）まゐさりいて給にひき
と、めきこえ給へれは思ひもよらすうち見かへり給
へるに星月夜のたと〳〵しきにゐほしのふと
見えたるに心まとひし給てやかてうつふし臥」（五一丁オ）
給てをともし給はぬをこのくし給へるちこ君は
とく〳〵といひわひてさしよりて見るにおとこの
ゐされはいみしくおとろきたるけしきにてたちかへ
り入ぬれはさうしもひきたていますこしひき
よせたてまつり給に月ころものをおほしてあるか

なきかなる御心ちにはいきもたえはてぬへきさま
に見え給を仏におちたてまつるかたは人よりは
まさりて侍れはなめけなる心はよもつかひ侍らし
たゝ心やすくおほせたゝかはかりのけちかきはうへの
御心もことのほかには侍らすうけ給ぬれはさしもなとか
」（五一丁ウ）

おほさむなときこえ給ほとにちこ君つけゝるにや
おとなしき人のけはひにてこのさうしひきあけて
こはたか物し給そ仏の御まへとはしり給はぬか
いとひんなきわさかなとてさくりよれはうちわらひ
給て仏のみちひき給へれはこそはかうねかひのまゝに
おもむき侍ぬれとてさうしくちのたゝみにかり
ふしにそよりふし給へりけるこの殿におはしけりと
思ふにむねはおちゐぬれとおりあしう御心ちも
いかにといとゝおほしまとはるらんとわひしけれと
とかうきこえさすへきやうなけれはひと所の」（五二丁オ）

御ことを見奉りなけかせ給ほとにおなしさまに
のみしつませ給てさらに何ともきゝわき給へうも
おはしまさゝめるをなとなけくけはひこの御めのと
にやとそきこゆるたゝかはかりにて侍らんかへらむに
いたうふけぬれは月まつほとかうてはへらむとそ
のたまふさらはこなたにこそはいらせ給はめあまりなめ
けに侍ときこゆれはさうしよりこなたに女君を入
奉り給つたうとく水の心ちしてあせのこちたう
なかれ給けはひはたつきなとのうつくしさは
世にたくひなき物におもひしみきこえ給へる御」（五二丁ウ）

ありさまにおとり給ましかりけりと思ひあはせられ
給にいとゝのおりゆかしうわりなし年比なとて心
のとかにのみおもひてすくしつらんあなかちにこよひ
のうちにこの仏の御まへをゐていて給へかめれと
かた時のほとをたにおほつかなくおもひみたれ給はん
御ありさまもことはりに心くるしかるへきころなれは
いかにもこの御心見さためてこそなとよろつに
おほしのとめてたゝきしかた行末の心のうちなとを
なつかしうきこえしらせ給にそ御心ちはのとまり
てとりあへすこほれつる涙もせきとゝめ給へれと
」（五三丁オ）

時のまもたちはなれ給はす見奉らせ給にこそあな
かちなるさまにてゆなとみいれ給へいかにものし給
らむかゝる事をもいかにあさましうきゝ給らん
なとおほしやらるゝよりほかに露はかりみゝとまる
へきことそなかりけるあり明の月もいてにけれは
かうしのひまともよりところ〳〵もり入たるかいとゝ
心つくしなるにおほしわひてかうしのもとのかきりを
はなちてをしやり給へはのこりなうさしいりたる
を女君いとわりなうてひきかつき給へるをとかう

ひきあらはしつゝ見奉り給に斎院にそいみしう」（五三丁ウ）
にたてまつり給へりけるたまのをの姫君の
やうなるかはねのなかにてもかの御ありさまに
すこしもおほしたる玉のひかりにたにかよはゝ袖に
つゝみても見まほしうおほしねかひつるにかう
をとき、ものむつかしかるましきわたりにすこし
のなくさめところのありけるもたゝあなかちなる
心の中をあはれと見給てかゝるかたしろを
神のつくりいて給へるにやとおほしよるも
あちきなうなみたそこほるゝ
　歎わひねぬ夜の空にわたるかな心つくしの」（五四丁オ）
あり明の月ときこえ給へといらへ聞え給はぬ
そいとくちおしかりけるいかにそかはかりまて見たて
まつりそめてすくせなといふなる物のことさまにもの
し給はゝいかゝすへきさてもや世になからへんなと
あすのふちせもうしろめたうおほさるゝまゝに
あらましことをうち返し〳〵きこえ給ほとにま
ことにあけ行けしきなれは御ともの人〳〵たち
やすらひつゝをとなうなれといまよりのちのおほ
つかなさの中〳〵わりなかるへきをいかゝすへき
かはかりはいつもかたうしもあらしをへたておほく
」（五四丁ウ）
もてなし給はんこそほいなく心うかるへけれさらは
霧のまよひたと〳〵しきほとにもろともにとこそ
思ひ侍れはいかに〳〵ときこえ給へはまことにさもやと
おほすかあさましうわひしきにまいてなにとかは
いはれ給はんあなおほつかなのわさやかはかりの
みにやなとうちわらひ給けはひもいとゝきかま
ほしうめてたきをいつしかかやうにて見たて
まつらはやこの御心ちのすこしよろしうたにならせ
給へかしなとちかうよりふしたる御めのとなとは
いひあはするにあふきをすこしならし給へはまいりたる
」（五五丁オ）
に夜のほと御心ちいかゝよもすからねんしあかし侍つる
しるしはさりともこよなく侍なんかしとの給へは御心ちは
おなしさまにそこのおはしまし所の見くるさをそ
くるしかりあかさせ給てときこゆれは人〳〵のあしう
きこえなしたまへるにこそあらめ物くるしおしう
おもひやりなきさまにきかせ給らむこそはつかしけれ
との給て夜のほともうしろめたけなりし御けはひ
の心くるしさに宰相の御かはりにとてこのすのまへ
にてあかし侍つるにみねのあらしもはけしうてみたれ
心ちもなやましけれはそなたにもまいらていそき
」（五五丁ウ）
まかりいてぬときこえさせ給へいまよりはにうたうもまめ
やかにつとめ侍へけれは無量劫をへたてゝもさりとも

ねかひかなひ侍なむとそたのもしきわたくしの御
心よせもなをたすけはて給へなとなつかしうかたらひ
給へる御けはひたによそに見ないたてまつらん事は
いとくちおしかりぬへかりけりうへはよへもき、給し
かとなにかはいとうしろめたう哀なる御ありさまを
すこしもけちかう見給てさりともあはれとは心とめ
給はさらんやは心よりほかにあは〳〵しきさまにやなと
おほしうたかふへき所ならねはなとおほしなからもこ
」（五六丁オ）

の月ころは明くれねをのみなきしつみていみしう
やせそこなはれてうちとけ給へるをほとなき軒の
月影もいか、ありつらんすこしもなのめならんことは
いみしうはつかしけなる御ありさまにこそとおほしあ
かしつるにか、御せうそこもちかおとりし給はぬにやと
むねのうちさはきてうれしうおほさる、そ哀なるや
よへはいたうふけ侍にしをあら〳〵しき風のけしきに
つけてもみちの程うしろめたしうおもひやり聞え
させしにとまらせ給にけるもしらすれいよりはまとろみ
入侍にけるもけに御いのりのしるしにやといまよりは
」（五六丁ウ）

さらは草のまくらも心し侍へうこそはときこえさせ給へるを
とけてねぬまろかまろねの草まくらひと夜はかりも
露けき物をほのかにはあらぬならはしをとすこしほ、ゑみ
たるこゑにてわさと御返ともなくの給ふをひとりきくは
あかすやおほえけむまねひ聞えけれは
草枕ひと夜はかりのまろねにて露のかことを
かけむとやおもふとそきこえ給へるまかきの霧の
いと、ひまなくたちわたりて月影も中〳〵くもらはしう
なりぬれはいと、たちいてかたうおほさる、にみちすゑ
御くつもちてまいりて霧はれゆき侍らは京のうちは見
」（五七丁オ）

くるしうこそなり侍ぬへけれ御車いてまいれとやおほ
せつかはすへきと心もなけに思ひて申せはくはやい
たうなにくみそとてたちいて給ま、に
葛のはふまかきの霧もたちこめてこ、ろのゆかぬ
道のそらかなとはやすらひ給へと露のいとしけきなか
をさしぬきけしきはかりひきあけてあゆみいて給を
人〳〵のそきて見たてまつりつ、めてまとふさま
ことはりにそありける殿におはしつきてもおもかけは
まめやかにこひしう思ひいてられ給へはまことしうむつ
ましきありさまになりてこのま、の心ちせは思ひはな
」（五七丁ウ）

る、かひなくすてかたうもあるへき世かなとおほしつ、
くるにも殿うへなとのわれらをほたしにも思ひたらす
心につく人いてきなはか、る心はやみなむとつねに
はの給はするをあるましき事とのみき、つれとけに

さもありぬへかりけりとそおほししらるゝやかてね
られ給はてつとめてもいとゝ御心ちのおほつかなさ
なと聞え給てさてもけさはれいならぬ心ちにまとひ侍て
　おもかけは身をそはなれぬうちとけてねぬ夜の夢は
見るとなけれとなとやうにきこえ給へりける御つ
かひかへりまいりてたゝいまなむうせ給ぬとてのゝしり
」（五八丁オ）
侍つれは御返もきこえさせてまいりぬると申をきゝ給
は御心ちいとゝあへなくあさましともよのつねなり
けにわつらひてはほとへ給ぬれと露のかことをと
あはめ給へりつるもたゝいまのことそかしなと哀に
はかなき世のありさまもおほししられていとゝもろき
涙かことかましうもりいてぬたちまちにおほしいそく
ひとかたにしもあらすこのほとはあまたたひ行かへる
へき道におほしつるをいみのほとなとはふとしも
えかよひはやとおほすもまことにいとゝ中〳〵心もと
なくわりなしはかなかりし花のたよりのほかけより
」（五八丁ウ）
はしめよへのけはひの哀なりしなともおほしいて
らるゝにさらによそのことゝもおほえ給はすあかすあはれ
にて中将の君のもとにこまやかにとふらひ給ことをろか
ならす御返はいまはかひなき事をはさる物にてをくる
ましきさまに侍人を見給へあつかひてなむうちつゝき
いみしきめを見侍らんことの心うきことゝあるを見
給にかゝるなかのかなしさはいつれもをろかなるへきには
あらぬなかにもおなしけふりにもとの給けしきもなへ
ての世にはあらす見えしをけにいかにおもふらんとおもひ
やらるゝけしきもむけにおほつかなからましかはいと
」（五九丁オ）
さしもおほさゝらましをほのかなりしてあたりけはひ
くまなかりし月影なとすこしなくさめよと神仏の
まとはし給ふにやとおほえしは物おもひの花の枝さし
そふへかりけるすくせにやとこれをさへかひなうきゝなし
ていかなる心ちせむとこの比はこと〳〵なうそおほしな
けきける
　こえもせぬ関のこなたにまとひしやあふ坂山の
かきりなるへきとおほしつゝくるもいとゆゝしういかて
かさりとも神仏よにおはせはさるめ見せ給はさらんと
ねんせられ給てれいのこまやかなるかたにおほしたのむ
」（五九丁ウ）
御いのりのしともにかたらひ給つゝいのりともなとせさせ
給けり後の御ことなと宰相ひとりあつかひ給に
しのひたれと山をくりの人〳〵もあまたたてまつれ
給そのほとの御あつかひおほしいたらぬことなうこま
かにとふらひきこえ給を宰相はいとありかたう思ひ
しられ給日かすのすくるまゝにありあけの月影は

おもかけにこひしうおほえ給てしのひありきも
ことにし給はす夜の衣をかへしわひ給よな〳〵は
さすかにあやしうおほさるれは
かたしきにかさねぬ衣うち返しおもひへなにを
」（六〇丁オ）
こふるこゝろそなときこえ給へとさらに日をまつさま
にてなとのみきこえ給へはおほしわひていみのほとも
えまちあへすしのひてわたり給へり宰相の君たい
めむしてもつきせすあはれなるけしきにてかゝるなかと
いひなからもよのつねにはあらさりつる心さしのほとを
かたりつゝ露はかりはか〳〵しうかひあるさまをたに
見えてをくれぬる事といひつゝけてなへてのさま
ならす侍りつるならはしの名残はことはりに見給へなから
ゆゝしきことゝもを打つゝき見侍らんこと、いひていと
しのひかたけなりいまはのとちめにしもまいりて哀
」（六〇丁ウ）
なりし御けはひをさへき、侍にしかはそのおほすらんにも
ことにおとるましき心ちのし侍ていとはしう思ひ侍し
身もいまはいかてかなからへてなと思ひ給へしあらまし
ことも見えたてまつらてやみぬるこそいみしうほい
なけれなきみかけにもかひなき物には見え奉らしと
おもひ侍をいとたのもしけなうのみきゝたてまつる
にこそ猶世にはへるましきにやと心ほそうとなけき
給けしきあさからすあなかちにわか〳〵しきまて
侍しならひのなこりなさにうつし心もなきまて思ひ
まとひて侍めるありさまのさらになからふへくも侍ら
」（六一丁オ）
さめれははか〳〵しからぬ身にしもかはらぬさまにてなに、
かはし侍らんなと思ひ給へなりてなむとていとい
たうおもひなけきたるを見給にいとゝうしろめたう
ゆかしけれとまいてみつからなとの給へきにもあらさ
めれはかひなうてたちわつらひてそかへり給ひける三条
わたりにいとひろくおもしろき所この御れうとておほ
とのゝ心ことにつくりみかゝせ給をいてなにゝかせんと
御心にもいれ給はさりつるをあり明の月すませ給
はむにかひありぬやう見ない給てしのち我御心そへて
なへてならぬさまにいそかせ給けり皇后宮なとの
」（六一丁ウ）
きかせ給はんことのいとおしさそ心くるしうおほさるれと
さりとていまはゆつりきこえさせんことはあるましけれ
は四十九日なとすきなはわたし給はむことをおほしい
そくに女院御もの、けたちていとをもくわつらひ給へは
行幸なとありておほかたの世の人たに心のいとまなき
ころなれはまいて大将殿あからさまにたにえたち
いて給はぬま、に山さとのおほつかなさをいかに〳〵と
しつ心なうおもひやりたまひて

うかりけるわかなかやまの契かなこえすはなに、
あひ見そめけんあまりおほつかなきに心うくむかし
」（六二丁オ）
のことをおほしいてはかうやはもてない給へきなと
うらみきこえ給へるを宰相もけにいとあまり物を
おほししるましき御ほとにもあかすかはかりありかたき
御心をあなかちにうと〳〵しうもてないたてまつらんも
いとおしうなときこえ給へとよろつとりまかなひつゝ
きこえしらせ給し御ありさまのみおも影におほえ給て
ひとくたりもひきわたすへき心ちし給はねはいとゝ
ひきかつき給てなきふし給へるをたれもきこえわつ
らひぬかういふ〳〵もなこりとまれる心ちする日かすの
程はひゝにあらはれいて給経仏なとをかたみにみ奉り
」（六二丁ウ）
なくさめ給をそのほともすきぬれは御しつらひなとも
れいのやうにあきらかにもてなさるゝにつけてはいまは
いとゝかなしさのかすそふ心ちし給ていとゝあやうきまて
なりまさり給を宰相はたれによそへてもかなしういみしう
思ひつれ給へるせちに恋しうおほえ給夕くれにもしもや
なくさむとわたくしの御心さしに心ことにつくりをき
奉り給てつねにむかひ給つゝおこなひ給ひし十斎（休イ）の
仏たちを見たてまつり給にもやくしにはたゝわか御ことを
なむ申すとつねにいひしらせ給しをおほしいつるに
甘露法楽のくすりもいまはなにゝすへき身にも」（六三丁オ）
あらぬにたゝおはしにけむかたにたにをくり給へかしさはか
り
のことはかたうしもあらしを光明不絶にやとの御ちかひこそ
かなひかたかりけれなと人しれすおほしつゝく
夢さむるあかつきたかをまちしまにな〻なぬかにも
やゝすきにけりなとおほしつゝけらるゝ日数も浅ましう
て袖をかほにをしあてゝなき給いとくろき御そに
いとゝもてはやされたる御かしらつきかみのかゝりなと
もゑにかきとりて人に見せまほしかりけり大将殿は三
条殿にわたしたてまつり給はん日なとさため給て
いまはたゝむかへきこえてむとおほすに女院つゐに
」（六三丁ウ）
うせ給ぬれはいとゝたえこもり給ぬるもいとくちおしく
わひしうおほさるゝことかきりなしかうのみおもふ日数の
すきつゝたかふやうにのみあるはつゐにいかなるへきに
かとおほすもしつ心なくうしろめたきまゝに御文はかりは
日に二たひ三たひもうちしきりつゝきこえ給へと御返
そつゆなかりける宰相にもほいなくてすくる日数を
心もとなかり給つゝこの御いみすくしてむかへきこえ
させんなとの給たれはけに何かはいまはまかせきこえ
てこそは見めなとおほせはまつけふあすれいの所に
わたし侍てありさまにしたかひ侍てこそはさやうにも

」（六四丁オ）
なとそきこえ給ける姫君はふる郷にたちかへり給
はむことも物うくなをいましはしなこりの所をたに
おきふさまほしうおほせと中将はあせちの大納言の
御あたりにこの春つかたよりかよひ給へりめつらしき
さまの心ちになやましけにし給をかくたえこもりて
すくし給へるおほつかなさもいつしかとおほせはいま
さへかうしつ心なうかよひ給はんもいつかたも心くるし
かるへけれは大納言殿の君をもおなし所にて心のとか
に見むとおほすなりけりとしのはてになりてそわたり
給ける御しつらひなともありしなからなるにひとりたち
」（六四丁ウ）
かへりたまへる心ちかなしさもよのつねならんやは
あけくれさしむかひ給へりしおもかけはかりは身にそひ
たるやうなれとおきふしにつけてものおそろしう
心ほそきこゝちのみし給てさらになからふましうおほ
いたる宰相もいとことはりに心くるしけれとひめ君
またわたり給はねは夜なとはとまり給こともかたかり
けり日ころふる雪のとしのゝこりすくなくなるまゝに
いとふりかさなりつゝきえやるへくもあらすしみわたり
たるを見いたし給て
ことはりのとしのくれとはみえなからつもるに消ぬ
」（六五丁オ）
雪もありけりなとやうにはかなきことのはをのみむ
かしのかたみにはおほしなくさめける日のくるゝまゝに
風のおとなひもあらましくてよこさまに吹いるゝ
あられのをとも物おそろしうなりぬれは御かうし
とも、いそきまいりて女とちさしつとひて物こゝろ
ほそうおほゆるに姫君はまいてたゝひとりの御かけ
にてこそは雨風のをともふせき給しかいひしらす
心ほそくおほいたるゝもことはりにて宰相の君をた
れもうらめしう思ひきこゆ大将かうわたり給にけり
とはきゝ給へと日つゐてのあしうてあからさまにも
」（六五丁ウ）
ものし給はす心もとなうおほすに院の御いみもはてゝ
よろしき日なりけれはいとしのひて風のまよひに
わたり給にけりとかうたちやすらひ給へと山里の
御すみかにもことにかはることなう人めまれにてとか
むる人もなし雪はかりあるしけにふりつみたる庭の
おもはる〳〵と心ほそけなるを見わたし給にわかき
人の思ひはるくるかたなうなかめつくし給らん心のうち
いかならんと哀にをしはかられ給御たうのあつかり
たちたる僧のみあかしの消たるともしつゝとてわつ
かにいてたるをよひよせたまひて宰相殿はおはせぬ
」（六六丁オ）
かととひ給へはきのふいてさせ給しまゝにおはしまさす

大納言殿のひめ君なやませ給とてまれになんこの
とのにはおはしますと申せは弁の君といふ人にたいめん
せむといふ人なむあると物せよとの給へはひめ君の
御めのとのおとゝにこそおはすなれとてたちぬる
まゝに僧のいてつるつまとによりてきゝ給へはかけさり
けるにやあきぬいりて見給へはこゝにもねんすのく
いとたうとくしをかれておこなひつとめ給ける人の跡と
見ゆそれよりやかて火のひかり見ゆるかたさまへすく〳〵
とおはすれとことさらになよらかにしなし給へる御
」（六六丁ウ）

そのをとなれは心あはたゝしき風のまきれにてきゝ
つくる人もなしもやの中のとより帳のそはなる屏風
よりのそき給へはこなたまくらにて火をつく〳〵となかめ
つゝそひふし給へるふと見つけたるにた〇それかと
まて思ひいてられさせ給みたらし河のおもかけ
さへたちそひて心さはきするにやかてかのかたはらに
たちいてまほしきおとゝといひつる人にや北おもての
かたよりきてにしのわたとのにやむことなき人の
おはして弁の君にあはむとなんの給とこの僧しか
たゝいまいふはたれにかあらんさるへき人こそおほえね
」（六七丁オ）

もし大将殿のおはしましたるにやと思へときのふの
文にもさもの給はせさりし物をいかにもまかりてたつ
ね侍らんとてたては又ある人もしさにもこそあれ
この御となふらのあかゝりけるかなみかうしにあなも
あらむ物をとてすこしとりのけつれは君もちいさき
木丁ひきよせてふし給ぬめり人〳〵ちかうさふらひ
給へなといひをきてこなたさまにくるまゝに人もひ
さしくおはしまさぬかたにおほえなき匂ひこそすれ
あなむつかししそくやさゝましいとくらしとてたち
かへりたれはわかき人〳〵はいとゝさはかり物おそ
」（六七丁ウ）

ろしけにおほしめいたるになとかう物くるおしうおはすらん
おにはくさくこそはあなれ仏の御かほりにもあらむと
いへはまたかくれみのゝ中納言やおはすらんなとくち〳〵
たはふれにいひなせと君はまことにものおそろしうて
かほなからひきかつきてふし給へりめのとしそく
さしてくれは帳のうちにやをら入給ぬれとしる人
もなしおとゝにしおもてにいきていつらなとたつぬれと
いらへする人もなけれはかへりきてあやしきわさ
かなありつる僧もいてにけり又人もあへてなしいかなる
ことならんつまとはいとひろうあきて雪のみそふり
」（六八丁オ）

入たる月はなけれととはあかておかしき夜のさまかな
風はおこるとも女もすきぬへかりける物をいかなるけ
さう人のたつねきておとなうたちかへりぬるならん

くちおしきわさかなといひてみなわらふに帳のかた
ひらをやをらかゝけていとひさしうまちきこえつるに
をともし給はてしそくのみ見えつれはうちまいるへき
かとてなむまことは身もみなしみはてゝこよひえかへる
ましきをとかくいらせ給ねとていとなれかほに
女君をもひきいれ奉り給へは人〳〵あさましあきれ
たる心ちして物をたにいはれすまたとかうきこゆ
」（六八丁ウ）

とてもかひあるへきならねはたゝみつからの心さかしらにや
宰相殿はおほさむいとおしきわさかないとかう心あは
たゝしう侍らすともいまはことさまにとはきこえさせ
給はすはへめる物をなとひとりこては宰相のゆるさゝらん
にはいかてかなひけし侍らんたゝ心やすう思ひ給へと
つれなうの給へはまたもきこえさせんかたなうて浅
ましううちとけ給へりつる物をなとなけく〳〵
のきてうちふしぬありしまろねのこゝろつくし
なりしをこよひは心やすくときちらし給てうち
ふし給に女君はおちまさり給てなきいり給へる」（六九丁オ）
さまのなのめならす心くるしきにおほしわつらひぬ
されとこよひはこけのさむしろおほしやられすいと
とうあけぬる心ちしてとりのねのつらさもけさそ
おほししられける弁のめのとまいりてあけはなれ
ぬとはしらせ給はぬにやいとはしたなきほとになりぬ
となけくこゑし侍なりときこえさすれはまた夜は
ふかゝらむ物をかつらきの神のさかしらにやとはの給
やとからうしておき給てさしぬきのこしひきゆひ
給もへたておほう心ほそうおほえ給もいとかうあさ
ましき心のほとはいつのほとならひけるにと我なから
」（六九丁ウ）

もとかしきまておほさる
ときわひし我したひもをむすふまにやかてたえぬる
心ちこそすれあまりなる心いられもいかならんとゆかし
けれはいひけち給へと弁のめのとはめてたしとそきゝ
ける月ころの御物おもひにいとし〈ゝ〉き御心まとひさへ
たくひなくてなきあかし給へる御涙のふちもけに
身をはなかさぬものにやといみしう心くるしう
見をきかたきをくるゝまつまのおほつかなさもわり
なかるへく又さりとていつしかあらはれいて人にあつ
かはれんもならはぬ御心ちはなをいかにそやつゝましう
」（七〇丁オ）

おほさるゝをたゝ宰相にもしらせてわたしてむ明くれ
さしむかひていひなくさめまきらはさはをのつから心
よりほかにわすれくさのおふるやうもありなんなと
おほしてその車こゝによせさせよ心ちのいみしうなや
ましけれはえいてぬなりとの給へはみかうし一まはかり
あけて御車よせさす廿よ日の月なれは月もまた

いとあかきに雪のひかりさへくまなうてひるのやう
なるにおとこ君まくらかみの木丁をしやりて見いたし
給へれはいつれをむめとわくへくもあらすふりかゝり
たる枝さしともかのありしゆきすりのこすゑにいと
」（七〇丁ウ）
ようにたるも思ひのほかにめとまりしほかけおほしいて
られていみしうあはれなれは女君にことのねきゝし
さまなとかたりきこえ給ておもはすにおかしかりし御
ほかけはそれにやとおもひよそふるまてありかたう
ものし給しかなほと〳〵うつりぬへかりしかと思ひそめ
つることかはらぬ心のくせなれはかしこうこそおもひしの
ひてやみにしかあの木すゑともはその夜の心ちして
あはれなるをなを見給へとせちにおこしきこえ給て
ゆきすりの花のおりかとみるからにすきにし春そ
いとゝ恋しきとの給にいとゝまことかましうなかしそへ
」（七一丁オ）
給物からこの御ことにはみゝとまり給てさま〳〵にはつ
かしうありけるかなときゝ給にも
よそなからちりけむ花にたくひなてなとゆきとふる
枝となりけんなと心のうちにくちおしうおほさる御車
もたけたれはいとかろらかにかきいたきてのせ奉り給へる
を弁なをいとにはかにこそ侍へけれしはしはかやうにて
もおはしましなむ物を宰相とのもいかにあやしくおほ
さむときこえさすれはならはぬあかつきおきもくるし
かるへけれはなりまつたゝ一人はかりとくのり給へといそ
かし給へはいとゝ心あはたゝしき心ちしてとまる人〳〵に
」（七一丁ウ）
よろつはいひをいてひきつくろひてまいりぬ殿に
おはしてまつ我おり給て御木丁ともとりいてなとして
れいのおろしたてまつり給て弁もおりぬれはみちすゑ
にこの人ありつかす思ふらんつほねなとあるへかしうし
つらへなとの給はすれはなにかたひとなおほしめしそいま
いとよくありつかせ給なむといひてけにいと思ふさま
なるつほねしいてゝすへなとしてあつかひありく君は心
やすくおもふさまにおほされて日たかくなるまて御
とのこもりたるにとのゝ御かたよりたゝいまわたらせ
給へときこえさせ給へるにそからうしておき出給へる
」（七二丁オ）
大弐のめのとまいりてうへもいつくにおはしますそととはせ
給にしり侍らぬよし申侍しををろかなりとさいなみ給し
こそわりなく侍しかなをありかせ給はんところしらせさせ
給へと申せはわらひたまひて入といりぬる人まとふなる
山みちなれはしらせきこゆともたつね給はんことかた
くこそあらめおなしくはすいしんしてをありきたまへ
なといひたはふれ給御けはひのきかまほしうめてた
けれは弁のめのともひとりゑみせられて木丁のほころひ

よりのそけはくれなゐの御そとものわたすこしふく
らかなるにうす色のかたもむなるなとかさなりたるいろ
」（七二丁ウ）

あひなへてならすきよらに見ゆるによへの雪に所〳〵
かへりしほみたるさへことさらにかくてこそ見めとなまめ
かしくめてたしゑほうしのひたいもすこしあかりひんくき
しとけなけにてまたいとねふたけなるすみのいろ
あはひなと雪にいと、もてはやされ給ひてあたりまて
こほる、心ちする御にほひあいきやうなとを大弐のめのと
かゆの御まかなひしてつ、ましけならすさしむかひたて
まつりてううちゑみつ、見たてまつるけしきのめてたさ
こそたに思ことなけにいけるかひある人とそみゆるや
御てうつはかりをめしてまつめすにまいらむとてさうそく
」（七三丁オ）

しとけなけにしないていて給をたいにぬる見侍りぬ
まつなを〳〵ときこえさ○れはいまさへあまりねちけ
かましくならはし給そ心もとなくはまつかはりしてよと
の給へはいてやるに事もあしうならはし奉りたりとも
思ひ侍らぬ物をなとうちわらひたるけしきもたに
たけうめてたしかのきこえしわたりのふる郷にひとりたち
かへりて心ほそけなれはけふやかてむかへたるそとは
せ給はさらんかきりはうへなとにもなにか申さる、宮の
わたりもいとおりあしき比なれはよきこともの給はせし
三条にわたるまてた、しのひやかにと思ふなりおひ人ひ
」（七三丁ウ）